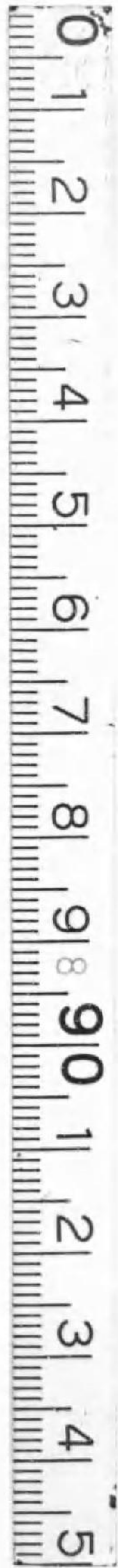


329
202



始



特217
483



目次

奥様慰勞會	一
飛んだ珍客	六
才、娘か	四
音樂會	七
狂亂	九
静ちゃん	一八
初見参	一九

二等賞聲	………	一〇一
旅	………	一〇二
少女よ、さらば	………	一〇三
小さき誇	………	一〇四
戦は捷てり	………	一〇五
青息吐息	………	一〇六
狙ひ定めて	………	一〇七

三國一の花嫁様は

奥様慰勞會

「ねえ貴婦、私等本當に詰らないわ、男て自分ばかり遊びに行つて私等を少つとも連れて出ないんですもの、留守ばかりよ、腹が立つて仕立がないわ、貴婦の方は何う？」

「まアさう？ 私の方もさうよ、女て本當に詰らないものねえ、チとお互に考へませうよ」

1
「え、考へませうよ」

早くも隣りの妻君と僕の妻君の此の會話を聞き込んだ僕は素破一大事とばかり、隣りの戸田君を訪問して、互に脊を丸くして相談し合つた末こりや一ツ奥様慰勞會を催うして、大に女性の歡心を買つて我等旦那様の手丸めて仕舞はふぢやないかと早くも一決。

二人は臆て素知らぬ顔して、各自其の女房を膝下に呼び寄せて、「明日は熱海へ連れて行くから」と申渡した。驚いたのは二人の妻君である。先刻程迄の旦那様への反旗も何處へやら、見てゐる裡に「良人は理解力に富んでゐるわ」と許り二人共々に、近所一體の奥様連中に吹いたも吹いたり。

さア其れを聞いた奥様連、羨し相に黙つて聽いてゐたが、「ぢや一寸お待ち下さい」と自宅へ飛んで行つたかと思ふが早い、ゾロゾロと出て

来て「わたしもお供を」わたしもお供を」と躍氣となつて申込んで来た屹度家へ歸つて旦那様に「貴方も理解力に富んで下さいよ——、ねえ貴方、ねえ貴方」と優しい聲で攻付け、厭應なしに承諾させて、さては總勢ドツと許りの申込み。

固つたのは僕と戸田君である。單に我等夫婦連れで手軽く行く可き筈であつたが、意外にも彼方此方のうら恥かしき若い奥様連から、「何卒宜しく」と頼まれたからには、厭とも云へず、ハイ承知ハイ承知のお蔭で、時ならぬ軍勢辯を並べた體たらくに仰天したが、今更後へも引かれず、眼を丸くして翌日を待つたり。

明くれば天は晴れたり氣は澄みぬと云ふ上天氣、時近づくに從ひ「御免下さい、御免下さい」と來るわ、來るわ、まんじともえとやつて來る

彼女等は一様に之は之はと許り花の吉野山と云ふ様な扮装振り、百花繚
 亂として一時に咲き亂れたるが如し。始めは聞く所に依ると、僕の妻な
 んか淡泊銘仙か何かを真て出かける筈の所、斯うして各自の奥様が一張
 羅を着飾つて遣つて來たのを見ては、心怏々として面白からず『貴婦方
 が左様云ふ振舞をなさるなら』と云ふ形相宜しくあつて、忽ち折角着造
 った姿を未練もなく投げ捨て、箆筒に手をかけるが早いか眼も眩む許
 りの晴着を取出し、故意と他の奥様連中に『私は斯嬾い、着物を持つて
 ゐるんですからねえ』と云はぬ許りに、之れ見よがしに座敷の真中へ擴
 げ置くこと暫し、聽てツと立つて別室に入り、再び出て來た時には成程
 我が妻ながらあゝあでやかな。
 出發用意既に整つた。



「皆さん一寸々々」と己れの妻は多くの妻君連を小手招ぐ、「え？」と綺羅星が寄つて行つて、何だか密々と話してゐたかと思ふと、早くも衆議院一決したのか、何を相談仕合つてゐるんだらうと呆氣に取られて見てゐる我々二人へ、突然二人の子供をツキ付け、

「さア今日は奥様慰勞會ですから、貴方方は出来る丈けわたし等奥様を安らかな位置に置かなくちや駄目よ。その第一條として子供のお守りを何卒」

「そりやヒドイ、苟も紳士を擱まへて……」

「いゝえ、苟も淑女の慰勞會を開かうなど、云ふ殊勝な御心掛のもとに成立した今日の會こそは、私等の貴重なる一票ですから、どうしても」と無理やりに脊負込まされ、退引もならず、戸田君と二人苦虫つぶ

した様な顔で、キイ／＼盛りの三歳連を受取り、眼を丸くしてお互に妻君連に聞えぬ小さい聲で「近頃淑女達の量見はどうも感服しませんなア！」とブン／＼愚痴いひながら、盛装の後から随いて行く。

子供は時々かアちゃんと言ひ手伸ばさうとするので、そなた旨いぞかアさんに抱つこするんだぞと半ば入れ智慧によつて、お母アさんの傍へと寄つて行く。淑女連急に眼に角を立て、「しつかりお守りなさいよッ」と一言の下に刎ね付けられ、今は返すに言葉もなく「いゝ、兒／＼いゝ見だよ」と胸羅聲絞つて大に確つかりしたお守振を發揮する。

女の方に云はすと、今あたし等が子供を抱つこしたら、皺一ツ寄つても大變の折角の晴着を滅茶々にされる、のみならずおッばいおッばいと云はれて御覽なさい、片肌脱いで乳房を引出さねばならぬ。すると苦

心惨憺して着こなした身體のスタイルか滅茶苦茶になる。即ち淑女の威嚴に關する。夫は延いて又旦那様連中の恥辱になるわらは等其恥辱を見るに忍びんや、と云ふ高遠なる抱負の下に、結局これは一層子守を良人の腕に托した方が、威嚴上から云つて、スタイル保存上から云つて最大良法となつて、斯くは子守役を御依頼したと云ふんであるんである。その仲の誰れか知ら、其變巧みは逃げ口實を考へたのは？ 仲々智識發達したる云分だぞ！

そんな文句は何うでもいゝが、子供の重いつたら、歩むこと二三町、己れの顔からも襟からも、鐵砲玉の様な汗がポツリポツリ滴れ出して來た。戸田君はと見ると、之も御同様だ。二人は互にすり寄つて『亭主と云ふ役も竝大抵ぢやないね！え！』

新大久保から電車に乗つて品川につき、品川から汽車に乗つた。多くの視線は一時にバツと灑がれた、これが單に夫婦のみであつたら一寸極りの悪い様子をするんだけど、彼女等は多數を恃んで、何れもシヤアシヤアとして『アラ西川さんの奥様、此方が空いてますよ』『ぢや奥様は此方へ。貴女が空きましたよ』と口々に晴れやかに語る所、傍人もあらず、衆目もあらず、こゝ奥様慰勞會萬歳なり。

二人の子供はそれから間もなくスヤ／＼と寝た。先刻から寸分の隙にななかつた我等二人の旦那様、ホツとして密つと傍に寝かし、先づ暫くは一人前の顔付が出来るぞと、どツかと坐り直して、さてと膝の上を手を置くと、ヒヤリとする。はて？ と眼を据えて『オヤオヤ／＼。何時の間にもやら無心の子供のオシッコが浸み込んでゐるんだ。己れは出來た

ばかりのフロックコートを着て上流社會顔を定め込んで出かけて來たのに。

奥様連中の眼は一樣に灑がれた。「まア」「まア」と應て左右から寄り集つて來た。己れは普通だつたら、天地崩れむ許りの大音聲を張り上げて非觀するんだけど、場所が汽車の中だから、「なアに此廢物位フン」とさも事なげに遣つて退け、故意と皺クチャにして大に氣前を見せた積りでゐた所、妻の恐い眼がキツと灑がれたのに、ハツと氣が附き、あとで叱られたら大變と、呼息をフツ／＼とかけて慌て、皺を伸ばし、妻の方へ見える様に其れを翳さして「それ此の通り、此の通り！」

國府津で乗換へ、途中何等の事なくして熱海着、かねて電報打つて部屋を頼んだあつたので、宿を目掛けて行くと多勢の召使共聲を摘へて『お

らつしやいまし』と均しく首を下げる。それに軽く答禮して奥へ奥へと進む奥様連は、一樣に貴婦人そつち退けの上出來、これか毎朝臺所に獅噛付いて八百屋の小僧相手に、あられもない大聲で「高價いね、負けて置きなさいよッ」と争ふてゐる方々とは誰れぞ知る可き。見よ一步家を後にすれば此の振舞だ。あとでポロが出なけりやいゝが……。

何は兎もあれと云ふので、己れと戸田君は眞先きにお湯へ目掛ける。歸つて來て見ると何時の間にもやら奥様連中は襦袢にお着代へ遊ばしてゐる。

「いゝ湯だ、實にいゝ湯だ」と共に讚美して見せると、

「さう？ さう？ それぢや入湯つて來ませうよ。ねえ皆さん」と己れの妻が先頭に立つて發言すると、我れも我れもと立上がり、最愛なる我

が子を小脇に抱え込んで、女中を案内に行列作つて湯槽めがけて一二三四、一二三四。

その間、二人の大の男は互にゴロリとなつて、口々に彼の中で誰れが一番綺麗だらうなどと噂してる所へ、「あア氣持ちが好かつた。まアい、お湯だつたわ」と一様にコテ／＼に塗つてゐた白粉を、サツパリ洗ひ落して戻つて来て座るや否や、

「何だかお腹が空いたわ、貴婦は？」

「え、私も」「私も」「あたしも左様よ」と、各自に空腹を訴へること切り也。貴婦人振りがそろ／＼ハゲ出して来たぞ。

ボン／＼手を叩いて、出て来た女中に「直ぐ御飯の用意をして下さいな」と總代役を承つて、己れの妻が云ふ。程なく膳が運ばれる。「アア

皆さん席を改めませう」と、いくら奥様慰勞會でも、我が國法は枉げられぬと見えて、床を後にした正座には己れと戸田君を据え、左右にズラリと奥様連流せるが如く控ふ。之れでこそ我れ等も旦那様甲斐あるなれとオホンと咳して、大きく幅ひろげ、先づ第一に箸を取り上げて「さア皆さんも」と合圖するあたり、西川他見男先生一代の傑作だぞ。

今は何んの遠慮も入らばこそと、男がビールなら私等はサイダよと、鱈取り上げて「貴婦酌ぎませう、酌ぎませう」の手際は餘りに御見事さ過ぎて、どれも之れもサツとコツプの上から迸しり出る始末、之れを見た二人の我等御良人の君、「なんだ其の態は」と叱り付けるかと思ひの外却つてニコ／＼して「其慶事に馴れぬ女こそ眞の淑女連なり」と賞賛して御座る。何處までお目出度く出来上つてゐる我が良人其だらう。

食事は賑かな裡に終りを告げる。今度は果物だ、それも何時の間にやら無くなつて了ふ。彼女等口を揃へて曰く「誰方にも遠慮が入りませんから此處楽しいことは無いわ」との御宣託ある。イヤ少しは遠慮しろ、己れの柿は何處だ、何處だ。

生れて初めて旅へ出た子供二人は一しきりウントコサ騒いでゐたが、何時の間にやら又スヤ／＼と眠つて了ふ。斯うなると、旦那も奥様方も「しめた／＼」と手を打つて喜び、「さア之れからユツクリ遊びませうよ」「トランプを始めませうよ」と丸く陣どつてグルリツとなる。

『ばゞ抜きですよ』

『イヤ點取りの方が面白い』

『だつて私等充分點取りが解らないんですもの、ねえ皆さん』

「え、さうよ」

「さうよ」

多勢に無勢、

「それぢやばゞ抜きにする」と折れて出た。

「アツそれ／＼あの信玄袋の中から昨夜買つて来た賞品を出しませうよ」と隣りの奥様が立上がつて引寄せ、粗を解いて、

「一等は此の羊羹半分よ、好いこと、一寸皆さん此の羊羹を紹介します藤村の羊羹です。日本一なんですよ。確かに遊ばせな」

各奥様之を聞くが早いか、

「あたし屹度一等になつて見せるわ」と白い腕を捲し上げて力味み騒ぐ

「えゝ二等、二等は栗饅頭一ツ、御覽なさい美味相ませう」

「まあいいこと、あたし一等にならうか、それとも二等にならうか知ら」
「二等も内容が充實してゐるのね、だけど矢つ張り一等の方が美味く見えてよ。アラ三等は？」

「三等はお薯だ」と之れからの説明を己れが引取つた。

「お薯？ 厭だわねえー。あたし三等なんか堅く御免だわ。お薯なんて少々貴婦人様方を馬鹿にしてゐるわ、皆さん大に奮勵努力して、我々の名譽を落さない様に。フリーフリーおくさまアー」

「四等は？」

「四等はお茶一杯！」

「お茶一杯？ 詰らないわねえー、五等？」

「五等はお薯買ひに行くこと」



奥様慰勞会

てふ

「そりやヒドいわ、慘酷過ぎるわ」と反對論が彼方此方から湧く。

「だつて負けなかつたらいゝぢやありませんか」と戸田君が云つた。

「さうよ、わたしは負けないからいゝ」

「私も負けないから關係なし」と、皆な負けない連中ばかり。

「六等はなアに？」

「六等？ 何もありませんよ」と己れが云つた。

「何もない！ 悲惨な末路だわねえー」

「一寸カイゼルに似てるわねえ」これは好く云つた。

「さア始めませう、札を別けて下さい。知らない方がありますか」

「私です」と芳枝夫人が云ふ。

「それでは誰方が教へて上げて下さい」と己れは誰れに云ふとなしに云

つた。すると一昨日漸つと己れがら傳授された許りの妻は、さも得意氣に、ばゞ抜きと云ふのは同じ札、つまり同じい數の物は前へハネ出して數の合はぬの丈けは手元に持つてゐる、頃次先きの人から一枚抜き取り若しその數と自分が持つてゐる札の中に合ふのがあつたら又前へハネ出し、斯くして最後に一枚何うしても合はぬのが残つた人が、一番負けです。解りましたか。この遊戯は一名後家廻しとも云ひます。どうか貴婦後家さんにならぬ様にと説明し終つた。

「さア始めます、どれ私から始めますよ」と僕から左へ廻はすこととして、隣りに座つてゐた塚原夫人に一枚引かれたのをキツかけにして、順々に廻はつた。

勝負は次第に白熱して來た。

「貴婦あと幾枚？」

「二枚よ」

「まアいゝわね、前途に羊羹が見えるわねえ。あたし四枚よ、刻刻危険の迫まるを覚えてよ」

「戦ひは最後の五分間よ。軍國の淑女達おふるひ遊ばせな」と火花を散らして互に鎬を削る。その裡、綾子夫人が何気なく引いた札は思ひもかけぬ合札！ たつた二枚しか持つてゐなかつたので、一枚は今取つたのと合せて前へハネ出し、残りの一枚は「まア」と次へ引渡され、物の見事に一等賞！

「あッ嬉しいツ、それ羊羹、オホ、積善の家に餘慶あつたわ。それでは誰方にも遠慮せず頂戴します。皆さん御覽なさい。それ／＼口へ入り

ましたよ。まア旨味しいこと。頬べたがオツこちさうよ」と故意と舌鼓打つて見せるので、一同は涎を口一杯にして、おのれヤレと二等目掛けで力戦する。

「アッ、まア僕が勝つた！ そら」と札を投が出すが早いか、歡喜の聲を上げて、已れは栗饅頭を掴むが早いかバク／＼。

「こりや好い味だ、旨い」とチョツ／＼と舌打ちすると一等の綾子さん「本當に斯うして遙々熱海へ来て、東京のお菓子を食べると、又云ふに云はれぬ味はひがありますわねえ」など、盛んに吹聴するので、残りの連中今は上品に「まアお取りなさい」など、生ぬるいことは云つて居られず、两眼ツリ上げて「お取りなさいツ！」

惡戦苦闘、三等は芳枝夫人に當つた。ヤレ嬉しやと勝負に夢中になつ

て、漸く勝つた其の眼先さへ『さア賞品』とお薯をツキ出すと、眼を丸くして『オヤ〜これぢや勝つんぢや無かつたわ』と急にガシカリ、此の奥様のお薯嫌ひは有名なのである。然し今度は負けてゐる連中承知しない。

『どうしてもお喰りなさいな』

『で無いと戦ひの妙味が薄らぐわ』

それには芳枝夫人返す言葉もなく眼を白黒させて、一口喰べては胸をトン〜。

それからの勝負は早かつた。四等のお薯買ひは八字髯の戸田君。流石の戸田君もこれには尻込して、

『土地不案内の理由を以つて何卒お許し下さい』と平身叩頭するにも係

はらず、

『男がそんな事おつしやつて、男が——』と攻め付ける。

『貴方が無理に厭と仰しやるなら奥様に代理をお頼みなさい』

すると戸田の妻君、スワ一大事とばかり、『貴方、行つて被居いッ』と茲を前途と許り攻め寄せるので、戸田君、不承不精立上がり『風呂敷貸して下さい』と悄然する。

『紳士のお薯買ひ、素敵だわねえ』屹度似合つてよ『戸田さんの奥様は本當にいゝ旦那をお持ちだわ』と口々に囁す句々皆千金の皮肉、八字髯の戸田君こりや堪らぬ〜と逃げ出した。

五等のお茶一杯は已れの妻に。六等は塚原夫人、情なや何一ツ口へ運ぶことが出来ないので、仕様事なしにハンカチ許り嚙ぢつて



「皆さん覚えておらつしやい！」
 今度こそはく／＼と口々に必勝を期した二回戦は之れからだ。「あたし必ず一等を取つて見せるから一等の賞品をウンと増して下さい」と互にもう自分の手に入つてゐるかの様に勢ひ込んで「早く札を別けて下さい！」
 ツ」あゝ面白さかな奥様慰勞會！
 温泉の一夜は賑かに更けて行く。

飛んだ珍客

今日も己れと仲善しの津島君を遣つて来た。津島君は某大學の講師である。だから學者風を氣取つて金縁の眼鏡をかけてゐる。彼は學生の前では至つて鹿爪らしく装ふてゐるが、己れの家へ來ると、己れが一番大切にしてゐる葉巻を呉れ／＼とせがむ。己れは外の珍らしいお客に吞ませるんだつたら少しも厭な顔はしないんだけれど、殆んど一週間に二度位訪ねて來る彼にそれをセシめられるのが至つて面白くない。己れは自分ですへ平生殆んど吞んだことが無いんだに。それに此の葉巻たるや先達米國から歸朝した清田君の唯一の僕へ對するお土産であつたのに。價

格のことを云ふのも變だけど、時價一本三圓に價するものである。清田君が「やア」と突然己れの宅を訪問したのは、歸朝してから三日目であつた。その時生憎人もあらうに津島君が遊びに來てゐた。その場所です「アア之が君への土産だぞ」と出されたのが葉巻一箱であつたんだ。

それだから津島君は己れがチャンと其れを保有してゐるのを知つてゐるんだ。知つてゐるものだから「オイ葉巻をくれい」と云はれても厭だとは斷はられないんだ。え、ッ此處男にと思ひながら、故意と元氣よい聲を出して「よしッ」と叫んで無造作に其の場へ投げ出すけど、心の中を察し見い。「又減つた、又減つた」と呟やいてゐる。

今日も己れは例の如く煙草入れを差出した、すると彼は「オッ」と其れを覗つて來たんだと云はぬ許りに、煙草入の蓋を取除けた。其の中に

は素早く己れは葉巻を抜いて了つてあつたから敷島のみしか入つてゐなかつた。

「オヤツ、葉巻は？」

己れは故意と平氣に濟まし込んで、

「もう無くなつて了つたよ」

すると疑はし相に己れの顔を見て、

「君本當かい？」

「嘘付くもンか」

「フォーム」と彼は淋しい顔をして仕様事なしに敷島をつまんだ。そして何う云ふかと思つたら「此麼拙い煙草なんか喫めやしないよ」とほざいた。一體彼は平生家にあつて何麼煙草を呑んでゐるんだらう、屹度葉巻

ばかりを口に當てゝゐるから此麼に他人の家まで來て血眼になつて葉巻を漁るんだらうよ。講師は違つたもンさ。

「時に西川君、意外な珍客が上京して來たよ」

「誰れ？」

「當てゝ見たまへ」

「安達君か？」

「はいや」

彼は愉快相に己れの適中らないのを見詰めてゐる。

「長井？」

「はいや」

「誰れだらう？」

「云はふか、井出君だよ。」

「井出が、あの井出君がツ？ ど、どうして？」

「何うしてつて突然昨夜僕を訪ねて来たんだよ、吃驚しちやつたよ、よくこそと、それはそれは面白かつたよ」

「フォーム、こりや珍らしい、オイ妻ツ、井出君が上京して来ただよ」

「まア井出さんが、まア嬉しい」

「全くこりや意外な報せだ」

と己れと妻とは急にハツシヤギ出した。

井出と云ふのは己れが東京にゐる時からの親友で、非常に頭腦のいゝ、温乎な君子である、其の後彼は極めて重用されて京都のさる大會社に招聘された。その後己れは大阪に暫らく滞在してゐた時、彼は故意々々京

都から面會にやつて来た。その時始めて己れの妻に逢つた、漸次妻と話合つてゐる裡にこれは又意外な、小さい時小學校で同じ先生に教育されたと云ふ奇遇である。さア然うなると他人とは云へ他人らしい氣もしない、殆んど互は兄弟の様に親しんで己れの方からも屢々京都に彼をね訪て、三人共々に京極あたりを散歩したものであつた。それから己れは又東京へ戻つて仕舞つた。それツ切り別れて殆んど四年間と云ふものは己れは井出君に逢はないんだ今斯うして突然の上京を聽いて雀躍りするの無無理がない。

「して何處に宿をとつてゐるんだら、う僕の家へ来て宿ればいゝんだに」と己れは半ば憾む様に云つた。

「何か重大な用事があつたらしい、そして明後日の晩は是非君と二人で

西川君を訪問しようといつてゐたよ。然かも時間まで定めて」

「ホー幾時？」

「午後六時」

「然うか、ぢや斯う云つて呉れたまへ、是非晩餐を三人で共にしたいから必ず来てくれる様にと傳へて呉れたまへ、その準備して待てゐるから」
「よし判つた、兎に角君等夫婦に逢ふのを非常に喜んでゐたよ」
「然うだらう、然うだらう」

と大に僕等夫婦は領きつゝ、共に喜んで、津島君に色々井出君の様子などを訊いたりなどした。葉巻を捷ち得られなかつた津島君は聽てもう用事が無いと許りに歸つて行つた。

×

×

×



てんとう虫

翌日の朝から、妻は有りツ丈けの腦力を絞つて御馳走に取りかゝつた。幾度か鳥肉屋に人を走らせ、幾度か肴屋にお百度を踏ませ、幾度か八百屋へ駆け付けさせた、そうして一日中を費やして苦心又苦心して洋食を造る準備をして置いた。その上ヤレお菓子ヤレ果物と訪問して来る時間の切迫するにつれ、殆んど總ての用意は完全に終りを告げた。其の御馳走振りの華手やかさは、此の家あつて以來の出来事であつた山海の珍味と云ふ山海と云ふ文字は今日にして始めて用ひられる可きであると思はれる程用意された。もう此の上はと妻も己れも着物を着代へ出した。殊に妻は一心不亂に吟味に吟味を重ねて、一条亂れぬ様にお化粧振りを鮮かにした。我れながら見違へる許りの美しさである。

もう之でよしッ。

聴てチン／＼一六時が鳴つた。素破今からテーブルに用意をして置かないと、いざと云ふにゴツタ返しては醜もないと許り、早くも焚くわ煮るわ蒸すわ焼くわ。

然うして其等を机の上に乗せ、葡萄酒、ビールを立て果物も置き、花まで飾つて待つこと、廿分、卅分、四十分、何等の音沙汰もない。二人は少々氣にかゝり出した。「來ないんでせうか」「イヤ來ないことはあるまい彼嬖男だから」と話してゐる所へ津島君一人がヒョククリ遣つて來た。「井出君は？」と、我等夫婦の眼は一時に津島君の顔に灑れた。

「ウン突然萬止むを得ざる用事が出來したので今夜は何うにも斯うにも行かれないつて電話だつたよ、そして君が僕と二人分として出掛けて行って大に御馳走になり給へつて。」

妻と己れは一種異様を顔で見合せた。え、ッ又津島にムザ／＼喰はれて了うのか、己れはもう斯う聴くと同時に、急に張合も何も抜け果ててゴロリとなつて妬け糞に「君、ウンと喰ひたまへ、思ふ存分喰ひたまへ」

オ、娘か

己れが嘗て某省にゐた時、そこに面白い爺さんの小使がゐた、平生は至つて無口な老人だが、酒を呑むとそりや痛快な位よく話をする。そのお爺さんの若い時に斯う云ふことがあつた。

お爺さんは八王子子生れ、子供の時から俠容が好きだつたものだから、二十の時には早や立派な親分を持つてゐた。そして喧嘩だ仲裁だと云へば誰れよりも先きに飛び出し、時には廓遊びに現を抜かすと云ふ有様。

お爺さんの親父はそれを心配仕出し今のうちに身を堅めさせなくちや終ひには何處人間になるか解りやしないと、取敢へず女房を無理に持た

し、そして、

「お前も之れからセッセと外で遊ばずに家業に精出して呉れ、」と意見した。お爺さんそれが面白くなかつた。其儘自分の氣のない事を云つて俺の自由にさせて呉れねえのなら、俺も覺悟があると云つてブイと家を飛び出した。そして大阪へと心ざした。途中名古屋に立寄つた所其處の親分が馬鹿にお爺さんを可愛がつて、お前さへゐたい氣なら何日迄も遊んでゐると氣儘に自由にさせて置いた。お爺さんもそれぢやと當分名古屋に足を止めた。若い者の有勝ちとして又も茶屋遊びに身を崩した。所が今でこそ腰の曲がつた色の黒い爺さんで兎ても見られた顔ぢやないけれど、昔はよかつたんだらうその茶屋の娘がお爺さんの爲めにボツとなつた。明けても暮れても此の人ならではの夜は明けぬと云ふ執心振り、お爺

さんも嫌ひな道ぢやないものだから、二人は其れから隠れては所謂逢瀬とやらを楽しんでゐた。その裡娘が妊娠した、さア愚圖々々してゐては露見すると云ふのでお定りの駈落をやつた。それは夜の十一時頃四邊が森とした時、娘は芝居でよくある裏門から這ひ出した男は待つてましたと許り二人は夢中になつて逃げ出した、本道から行くと屹度掴まるに違ひないからと故意と野を越へ山を越へた。そして六里の道を駈けた。

「もう見付かる事もあるまい」と漸つとホツと息をつき何處へ行くと云ふ當途もなく各地各國の俠客の所へ行つては「たのみます」で一泊二泊と重ね、最後に筑波山の麓まで來た、筑波山の麓の當時名代の俠客は女の此の妊娠の姿にいたく同情して、身二つになる迄此處に泊まつてゐると止めた。その時女は臨月であつた。

漸次お互の氣心が解り出した頃お爺さんは到頭一切の事を親分に話した、親父と意見が合はないで飛び出したと云ふことから、國に嬖がゐると云ふことや、今まで所々方々流轉に流轉して來た苦勞を嘘偽りなく物語つた。

「へーえ、お前には嬖がゐるのかそしてゐて此嬖女をおびき出し、而かも腹に子まで拵へるとは罪だぞ、一體どうする積りた」お爺さんはその頃に漸く眼が醒め、無斷で家出したなれはこそ、今斯うして知りもせぬ家に氣を小さくしてその日その日を送つてゐるのだと後悔の臍を噛んでゐた矢先だつたから、斯う尋ねられると返す言葉もなく「へーえ」と頭を掻くより外はなかつた。すると親分は「お前失策つたことをしたとは思はないか」と訊いた。

「そりや、もう根が慰み半分にしたことが、斯う云ふことになつたんだから今更義理にも捨てるに捨てられず」親分は急に聲を改めて、
「お前も何日迄も人の厄介になつてゐるのは心苦しいだらう、もう眼が醒めたらうと思ふ。どうだ、故郷へ歸りたくないか」
「そりや歸りたいと思ひます」

「それぢや己れが歸してやらうか」
「親分が左様仰しやつて下さるのは有難いが、先程申上げた通り何分嬖が故郷にゐるもんですから、とても斯うして二人で歸るなど……」
「そりや判つた。お前が本當に歸りたいのならいゝ具合にして歸してやる」

「それが出來ますことなら」

「兎に角母が子供を生む迄待つたらその上で」と其の場の話はそれッ切りであつた。

それから間もなくのこと、玉の如き赤ン坊が生れた、赤ン坊は女であつた。恰度産後一週間程経つた頃を見計らひ、親分は又もお爺さんを別室に呼んで、

「今日今から逃げる、あとは己れが萬事引き受けて、此の母子は確かに名古屋の花本へ歸へすから、後の心配は無用だ、逃げるには斯うして」と小さい聲で親分は囁いた。お爺さんは唯々として聴いた。

程経て素知らぬ顔で口元を拭ひ再び妻の産室へ入つて來た。そして浮世話の二ツ三ツを語つてゐたが、聽て何喰はぬ顔して「どりや今から風呂にでも行つて來ようかな」と獨言する様に云つた。

「え、行つて被居いな、もう大分行かないんでせう？」と娘は薦めた。

「ぢや行つて來るぞ」

と云ひながら、スツと立上がつてチラと娘を見た。

「わたしの顔なんか見ないで行つて被居いよ」

と娘は更に薦めた。それぢやとお爺さんは到頭その室を出た。それから永久の別れとならうとは小説ぢやないが、娘露さらに氣附かず。

「オツ峯公風呂へ行くのか。此方へ來い手拭を貸して遣らう」

と大きな聲で聞えよがしに云ひながら、密つそり手招ぎし、素早くかねてから用意しておいた旅道具を持たすか早いかな、それツと眼配せしたお爺さんは有難や嬉しやと黙つた儘親分を合掌し、「あとを宜しく」と微かに傳へるが早いかなと飛び出した。

お爺さんは故郷へ歸つた、そして親父に永々の不孝を詫び、再び家の敷居を跨らさして貰つた、置去りにしてゐた女房は疾づくに子供を生んでゐた。子供は八歳であつた。八年間お爺さんは放浪してゐたのである。其れから心を入れ代へ眞面目に家業に精出した。

それから十九年間経つた、お爺さんが四十七歳の時である。或る晩方一同打ち揃うて飯を喰つてゐる所へ豫ねて知合の吉野屋と云ふ宿屋の番頭が「よしのや」と書いた提燈を持つて、

「親分ゐるかい？」と訊ねて來た。

「オー」とお爺さんが返事した。

「一寸茲まで來てくれ」と番頭は云つた。

「なんだ？」

と不審相な顔をしながら、お爺さんは出て行くと番頭は小さい聲で、「お前に逢ひたいと云ふ人がゐるんだから、己れと一緒に直ぐ來て呉れ」と云ふ。

「俺に逢ひたい？ ハテ誰れだらう。何人だ？」

「まア兎に角一緒に來てくれ」とのみ答へる。

「行くことは行くが、今恰度飯を喰つてゐるから一足先きへ行つてくれ。濟んだら屹度行くから」

「屹度だよ」

「わかつたよ、執拗いな」

「ぢや」と云ひながら番頭は歸つて行く、その後姿をヂツと見送つてハテ誰れが俺に逢ひたいんだらうと小首を傾けてゐると、聽て番頭の提

燈が道を曲らうとした、途端、ツカ／＼と出て来た小綺麗な娘がある、それが番頭に近寄つたと思ふと何だかコソ／＼と話合つた、お爺さんはそれを見て「ハテ？」と又小首を傾けたが、合點が行かぬ。兎に角行つて見ようと其の儘奥へ入つた。すると女房はけはしい眼付をして、「吉野屋からお前さんに何んの用事があるの？」と訊いた。

「なんだか俺にも其れが分らない」

「お前さんに分らないつて！ フン」

と一種妬ましい眼で見つて、

「大方いゝ女でも待つてゐるんでせう、早く行つて被居いよ」と捨て口に云つた。

お爺さんは幾度か首を傾けながら飯が終つてすぐ立上がつて、着物を

着代へ、

「一寸己れは行つて来るから」と云ひながら家を出た、應て吉野屋へとやつて来ると、主人始め一同は、

「親分もう先刻からお客様は待兼ねてだ、さアどうぞ」と口を揃へる。

「では御案内を」と云ひながら先刻尋ねて来た番頭が案内の役に立つて、お爺さんを二階の一間へ導き、

「此處です」と云つたかと思ふと其儘行つて了ふ。お爺さんは一體誰れだらうと襖をあけて入つて行くと、見知らぬ七十幾歳の老人の位と十九位の娘とがチョコキンと坐つてゐる。見たことの無い顔だ、こりや番頭は屹度室違ひをしたんだらうと、出ようとする時、

「モシ／＼」と其の老人は呼び止め、

「峯さん久振りだなア——」

と名まで呼んで聲かけた。

「俺は峯ですが、貴方は誰方でしたかね、お見外れ致しまして」

「そうかな、見外れたかな、己れは名古屋の花本屋の主人だ」

「えッ、花本……」

とお爺さん儲はと驚いて、逃げ出さうとすると、

「まア此方へ来てお坐りなさい、さア一杯」

と杯を突き出されたので、今更どうにも逃げる譯には行かず、小さくなつて畏まり、「へイ」と穴へでも入りたい氣持ちで其の杯を受けた。名古屋の親父と云へばその昔己れの娘をうるん臭い奴と睨んでゐた煙つたい親父であつた。考人はグイと見下しながら、

「俺の娘もお前さんには一方ならず厄介になりましたね」

と突然針よりも鋭い皮肉をギクリ。斯う云はれる迄もなくお爺さん胸に覺えがあるので兎てもジツと坐つては居られない尻をモジ／＼させて頭抱へて其處へ蹲まつて了つた。漸々首を上げて、

「なんとも申譯も御座いませぬ、もうなんと甲上げたら……」

と冷汗を流し、

「斯うなつちや思ふ存分にお處置して下さい、悪う御座いました」

とひれ伏した。老人はツク／＼打見やり、

「もう過去のことは何も云はぬ、お互に若い時は色々のことがあるものでナ、ハツ／＼」

と何事も飽きあらめて、

「彼女も息災であるからナ、安心してくれ。そして此處に坐つてゐる此の娘は」

「？」

「お前の娘だぞッ」

「えッ」

老人は今度は娘の方へ向き直り、

「娘、これがお前の本當のお父さんだぞ！ 逢ひたかつたろ、逢ひたかつたろ、お前のお父さんだぞ!!」

と老人は斯う云ふが早いか拳固で眼を擦つた。思へば別れて十九年始めて茲に親と名乗り子と名乗るのか。

お爺さんはもう胸一杯になつた。思はずポロ／＼涙を流して、

「む、むすめ許してくれ」

と手を突いた。娘はもう憾みも悲しみもなく、ヨ、と許り袖を顔に當て泣き伏した。

老人は漸くにして口を利いた。

「娘はお父さんに豫ねてから逢ひたい逢ひたいと口癖の様に云つてゐたが、今度俺はもうささきの命も知れてゐるので一遍東京見物したいと思ふて、序でだから、娘も連れられた娘の母が父の在所は八王子と教へたので、此處へ寄つた譯で、之れで先づ親子對面も出来たから明日は朝早く立つて東京へ行かうと思ふ」

お爺さんは猶も平に謝まつた後で、懐から金を出し、それを娘の前に置して、

「僅か許りだけど、之で東京へ行つたらお土産でも買つてお母アに持つて行つてやつて呉れ」

と差出した。すると娘は烈しく首を振つて、「どうしても要りません」と受取らない。再三再四薦めたが受取らぬ。母が假令お父さんが其塵事を云つて金を出しても決して受取つてならぬと堅く申してやしたからと應ぜぬ、それにはお爺さんも二の句も無く再びスゴくと金を懐へ收めて了つた。

それからしみるくと打物語り、その夜遅くなつて、「では明朝改めて参りますから」と一旦家へ歸つた。

翌朝、なほ薄暗いうちにお爺さんは起き上がつて、再び吉野屋へ来て見ると、もうチャンと旅立の用意をして二人はお爺さんの來るのを待つ

てゐた。

「それでは、今から東京へ被居るか」

と、名残惜しさうにお爺さんは訊ねた。

「ウン、もう此處には用も濟んだから、東京へ行く、今日一日で着くんだから」

すると突然娘は

「あたし東京へ行きたくない、もう此の儘名古屋へ歸ります」と云ひ出した。

「何だお前其塵馬鹿な事を云ふ、今日の日まで長い道中は何んの爲めにして來たと思ふ。東京へ行きたいからではないか、それを今更になつてさア〜東京へ行くんだ」

「わたし何うしても厭だ」

と娘は首を振つて動かうとはせぬ。

お父さんのお爺さんも薦めた、折角此處まで来てあと一日と云ふ所で東京を見ねえで歸るなんて、そりや量見違ひだ、東京と云ふ所はと大に效能を述べて勧めたが、何故か娘は何うしても歸ると云ふそんな不解屋があるものかと云つて責めつけると、仕舞ひにはワツと泣き崩れて、

「わたしはわたしのお父さんに逢つたから、もう何處も見たくない」と云つて、突然お爺さんに獅噛みつき、「お父さんッ、お父さんッ、う、うれしいッ」

お爺さんはもう斯うなると胸搔き撈られる様になつて、

「む、むすめ丈夫でう、お母アにも宜しゆ云ふて呉れよ、のう、俺も

う、胸が……む、むすめ、よ、お父さんを憾らむで呉れるなよ」

「ハ、ハイ」

と娘は又一しきり泣く、

到頭もう一足と云ふ所まで來ながら、東京へも行かず、老人はもう一晩お父さんの傍にと叫ぶ娘を無理に引つ張つて、再びもと來し道へとスゴく辿つて行つた。

◎

それッ切りお爺さんは母にも子にも逢はない。殊に母には筑波山の麓で置き去にした限りである。

お爺さんは今年六十六歳。斯う語つた後で、

55 「その娘も今ではもう四十歳になりませう。どこに何をしてゐるやら」

「モ—一遍逢ひたいとは思はぬかい？」

「思はぬことも無いけど、ハツハ〜ツ」

と強ひて笑ひに紛らしてゐる。その笑ひの中には云ふに云はれぬ萬感交々たるものがあらう。その胸中や如何？。あれは其れまで聴くに忍びぬ

音 樂 會

「御免下さり、御免下さり」

斯う案内を乞ふ聲が玄關に聴えた、折悪しく家には僕の外誰れもゐなかつた、確かに女の聲である、然かも優しい美しい聲である、ハテ誰れだらうと首を傾けてゐると、又も

「御免なさい」

今度は不在と思ふてか其の聲が可成に大きかつた。斯うなつちやヂツとして居られぬ、厭でも應でも答へなくちやと、「はア」と主人公立上がつた、そして素早く襟を掻き合せるが早いか襖をあけて大きな圖體を運

び出した、己れは斯うして主人公自ら出馬することが夥だしく威厳を損するものだと言ふことを知りつゝも此の場合如何とも仕様がなかつた、だからせめて何處となく流石に氣品四邊を拂ひ、應揚たる所音に響くおん君かなと思はれたさに強ひて悠然たる態度を急造し、そして立ちながら玄關の障子をあげた。此の場合己れは先方が客人であるから其の應對振りとして坐つて對するのが禮儀だと思ふた、然し坐つて御辭儀すると云ふことは假令如何に威嚴を顔に保存して置いても甚だしく主人公を零コンマに見せるものであると思ふた、苟くも一家の主人である、のみならず相當に世間に知られた男である、敢て自ら好んで自分を卑下されて見下されるが如き坐つて對する必要は少つともない筈である。女なら禮儀と云ふものがある、己れも此の家の書生ならばいざ知らず主人である

ぞ、若し坐つてあけて見て不幸にも其れが八百屋のおかみさんであつたら、何麼顔をするだらう？

立つてゐて若し先方が著しく身上の人であつたら『あッ、これはこれは』と改めて坐ればいゝ、威嚴上から云つても其が至當の處置だ、そうだよ、そうだととも無暗に威嚴を笠に着て己れは立つた儘の姿で客人を見下ろした。

「まア先生お久振りで」

「誰れかと思ふたら君かア。貴女ですか、よくこそ、さア何卒」と己れは云つた、茲で誰れかと思ふたら何々さんでしたか、これはよくと云つて相手の名を呼んだ方が非常に親しさが含まれてゐていいかと思ふたけど肝心の己れは名を忘れたんだ、名のみでなし姓も何も知らぬ、たゞ

の一回逢つた限りの女學生である。或日己れは散歩した途中で友人の妹に出會した、その妹と一緒に歩いてゐたのが此の令嬢である、妹は其の時此の方が、又此の方がと互を紹介した、ハア左様ですかと云つて二言三言の後左様ならと別れたんだ。

その紹介された女學生、それが斯う突然に尋ねて來たのである、勿論名も聞いたんだ姓も聴かされたんだ、然し誰れが覚え込んでゐるものか疾つくの昔、否紹介が終つたその刹那にさへ既に忘れて了つてゐるだもの、凡そ人間と云ふものは餘ッ程知名の人か、餘ッ程美人かでなくちや一度で名を覚えるなんてありやしないだらう口でこそ「あッ左様で御座いますか私は斯々申すもので御座いました」と如何にも旨いこと云ふけど、少し離れると、「ハテ先方は何んと云ふんだつけ」

だから今斯うして來られても「まア何々さん」の何々が出ない、仕方がないから君か貴女ですかでお茶をにごしてゐる。

「先生よく私をお忘れでなく」

「そりや覚えてゐますよ、いつか初子さんと一緒に歩いて」

「まアよく覚えて被居るわ、わたし光榮だわ、」

「名前もチャンと知つてゐるんですよ」

「まアー遠藤あや子と？」

「知つてますとも、玄關に案内を乞はるゝ聲を聴いた時最初は見當かつかなかつたけど、二度目の御免下さいの時はハ、ンあやさんだナと直ぐ解つたよ。」

自分ながら旨いわい。先方はさう聴くと無上に嬉しがつて幾度も光榮

で御座います、光榮で御座いますと繰り返へしてゐた。

「時に先生お願ひに参りましたのですが」

「何を？ あやさん」

あや子と云ふ名前を聞いたのだから、出さなくてもいゝ場所だけど
相手が親しく自分の名を呼ばれたのが何處に嬉しいだらうと云ふ判断か
ら打算して己れは殊更に彼女の名を用ひた。

「先生實は大學にゐる私の兄が其の友人から音樂會の札を頼まれたんで
す、そしたものですから今度は兄が私にお前も少し捌いて來いと云ふん
です、困つちまいましたわ。是非先生に少し買つて戴きたいと思ひま
して」

「ホー、買つても宜しいが何處の音樂會ですか」

「大學基督教青年會主催で上野の音樂學校内にあるんです、此處に書い
て御座いますから」

と云つて手にしてゐた札を差出した、己れは取上げて見た。

「そんなに好きと云ふ程ではありませんが、折角ですから買ひませう、何
枚買へばいゝんですか」

「二枚持つて参りました」

「幾程差上げればいゝんです？」

「一枚參圓ですから」

「解りました、では早速、お入りなりませんか」

「入つても宜しう御座いますが、奥様おらつしやいませんか？」

「一寸今留守です」

「では入りませんわ、あとで何うの斯うの云はれちや先生にお氣の毒ですから、兎角女は嫉妬心の強いものですからね。」
 仲々考へて御座るわい。

「では一寸お待ち下さい」と云つて己れは奥へ入つた。内心己れは金があつて呉ればいゝがとヒヤ／＼した、己れは己れの家にとれ丈け金があつてどれ丈け残つてゐるか殆んど無關心である、皆妻に任せツ切りである。だから今留守中斯うして不意に入用のあることがあると實際どこに何うしてあるのかサツパリ様子を知らないから全く困る。

妻は己れが金を呉れと云つた時必ず箆筒に手をかけるから箆筒に伏在してゐるに違ひないと思ふたから第一に開けて見た、何も見當らない、然しそこに袋があつた、この袋が臭いぞ。



袋を開いて覗いて見ると幸ひ紙幣束らしいのが見附かる、引つ張り出して見ると果して左様であつた。己れはいゝ位に此處に之れ丈けの金が存在してゐて好かつたと思ふた、若し此の金がなかつたら己れと云ふ人間は一吋赤恥を搔く可き幕であつたと思ふた、音に名高い西川を訪ねた切符を買つてくれますかと云つたら買ふと云つた、それぢやと渡すと、金が無いと云つた、成程立派な顔の人だつた、顔にも威厳らしいものが出てゐたが、ホ、皆さんお金が無いと云つて出て来た時の顔つたら無かつたわとあつて見い、他見男先生丸つぶれである。

幸ひなるかな金はあつた、己れは立派な顔に何等の汚點を附せらるゝことなくして済んだ、威厳もそれに依つて墜せずして済むことが出来た、して見ると兎もすれば他人のさげすむ金と云ふものは人格保存上に缺く

可からざる大なる背景と云はねばならぬ。

再び己れの姿は玄關に現はれた。

「二枚ですから僅つた六圓ですね、音楽會で安いものですね」

と僅つたに殊更力を入れた、その癖内心己れはまア何んと云ふ高價な犠牲だらうと心の中で白黒してゐた。

金を受取つたあや子さんは幾度もお禮を云つて、ひとり言の様に、

「本當に先生の様にサツパリ買つて下さる方があると斯うして歩くのが面白い程ですけど、此處お家は何處にもありませんよ、それは夫は濫い顔をなさる方があつてよ、そして随分皮肉なことを仰しやつて私等を全で強請者見たいに思ひなされる奥様まで被居るんですもの、助かりません

わ」

「さうでせう、若し今後又何時でもお持ちにさへなれば」

「え、何卒先生、一番先きに駆けて來ますわ。」

それぢや此方が助かりませんわ。

彼女は眞實嬉し相にしてイソ／＼と歸つて行つた、己れは其の切符を讀みながら坐敷へ戻つて來た。

「二枚買ったが誰れと行かうか知ら、」ヂツとして人選して見た。第一の候補者は誰れよりも先づ我が妻の君である。そりや偶には耳の保養上連て行つてもいい、然し兎に角子供がある。のみならず今では一緒に歩いてゐても昔と違つて少つとも嬉しくなくなつて來た、女房携帶は廻れ右だ。

細上は音樂厭ひだし、長田だと持つて來いたが情けない哉三日の便船

で洋行するんだから多忙だらうし、豊原君は誘ふに日暮れて道遠しの青山だし、ハテ誰れが。

まア待て／＼まだ三日もあるんだから慌てるには及ばん、そのうち誰れが見附かるだらう、成る可くならば花も欺く風情と諸共に。

ところが意外な男と其の晩約束して了つた。其の夜己れは東京驛まで知人を見送つて山手線に乗つて歸つて來る途中、恵比須驛で偶然内務省の吉山君と乗合はした。

「やア」

「やア」

「此方へかけたまへ」

と少し席を開けると、吉山君は「之はどうも」と一寸ばかり恐縮しな

から腰を下ろす。

「近頃何か面白いことでも」

と云ひ出して来るのを機會にフィと己れは音樂會のことを思ひ出した
こりや吉山君に當つて見い。

「君、音樂が好きかい？」

「音樂？ 實にいゝね」

「ホー好きだね、それぢや一緒に行かないか札か恰度二枚あるんだから」

「然し演奏者に依るね、誰れだい？」

「シコラ氏とか書いてあつた様に思ふ。」

「シコラ氏？ あの有名なシコラ氏の？ そりや有難い行かう、是非行
かう」



心には強き異性の引力に
ひかれながら
表づいたはすあらぬ体を
よどほった

てうや

「有名なのか」と聊か相手に釣られて訊いた。

「有名なのかつて世界一流だよ」

フォーム、斯う訊くと己れの好奇心はワナ／＼と動き出した。此處に始めてそれぢや己れもあの札を買つたのも無意義ぢやなかつたと思ふた、世界一流！ 斯う訊くからには解る解らんに関せず後學の爲め、それこそ威嚴の背景上聽いておけ、聽いておけ、何んでも第一流さへ聽いておけば後はどんな知つたか振りでも出来る。

二人は大久保で下りて、堅く其の日の時間を約束して右と左に懸て別れた。十間程離れてから吉山君が暗の中から此方へ向けて「僕の方から訪ねて行くぞ！ツ」と呶鳴つてゐた。

×

×

×

當日になつた。

午後二時開演とあるので、そんなに急ぐ必要はないとゆたりと煙草を

燻んでゐる所へ、吉山君が寝巻一枚で飛んで來た。

「君、君は和服で行くか、洋服で行くか。」

「洋服の方がいゝだらう。」

「それぢや僕も」

と歸つて行く。お互の家が一町位しか離れてゐないので何事の打合せも手取り早い。

程經て容姿端麗として吉山君やつて來た、己れも亦風采堂々として彼に伍した。二人は肩で風を切りながら揚々と家を出た、妻は二人の後姿をヂツと見送つてゐた、屹度久々での様子はいゝのに一寸胸の中がドキ

くツとしたんだらう。

横町を曲がる時そこに又吉山君の妻の眼が二ツ此方へ灑がれてゐた、彼女は屹度良人は西川さんよりか秀逸なる男振りよと思ふたに違ひない何故ならば彼女は己れを見てニツと笑んで御辭儀をしたから。若し己れの方が優さつてゐたら御辭儀どころか妬ましげに睨みつけたかも知れない、「先づくこれで宜かつた」と云ふ安心のほゝえみである、そのほゝえみを己れに呉れたのである。それを喜んで受けた己れは割の悪い役だ。新大久保驛で乗ると、其處へ吉山君と同じく内務省に務めてゐる菊池文學士が乗合はす、二人は吉山君の紹介に依つて立上がつて互にうやうやしく「どうぞ宜しく」と辭禮を交換してゐる間に折角占めてゐた坐席を土方風情に諸共にシテやられ、詰らぬ顔で釣草にブラ下がりながらテ

レ隠しに「今日はいゝ天氣で。」

菊池君も矢つ張り音楽會へ行くんだ相な。吉山君に小さい聲で、

「君、一等？ 二等？」

「一等だよ、君は？」

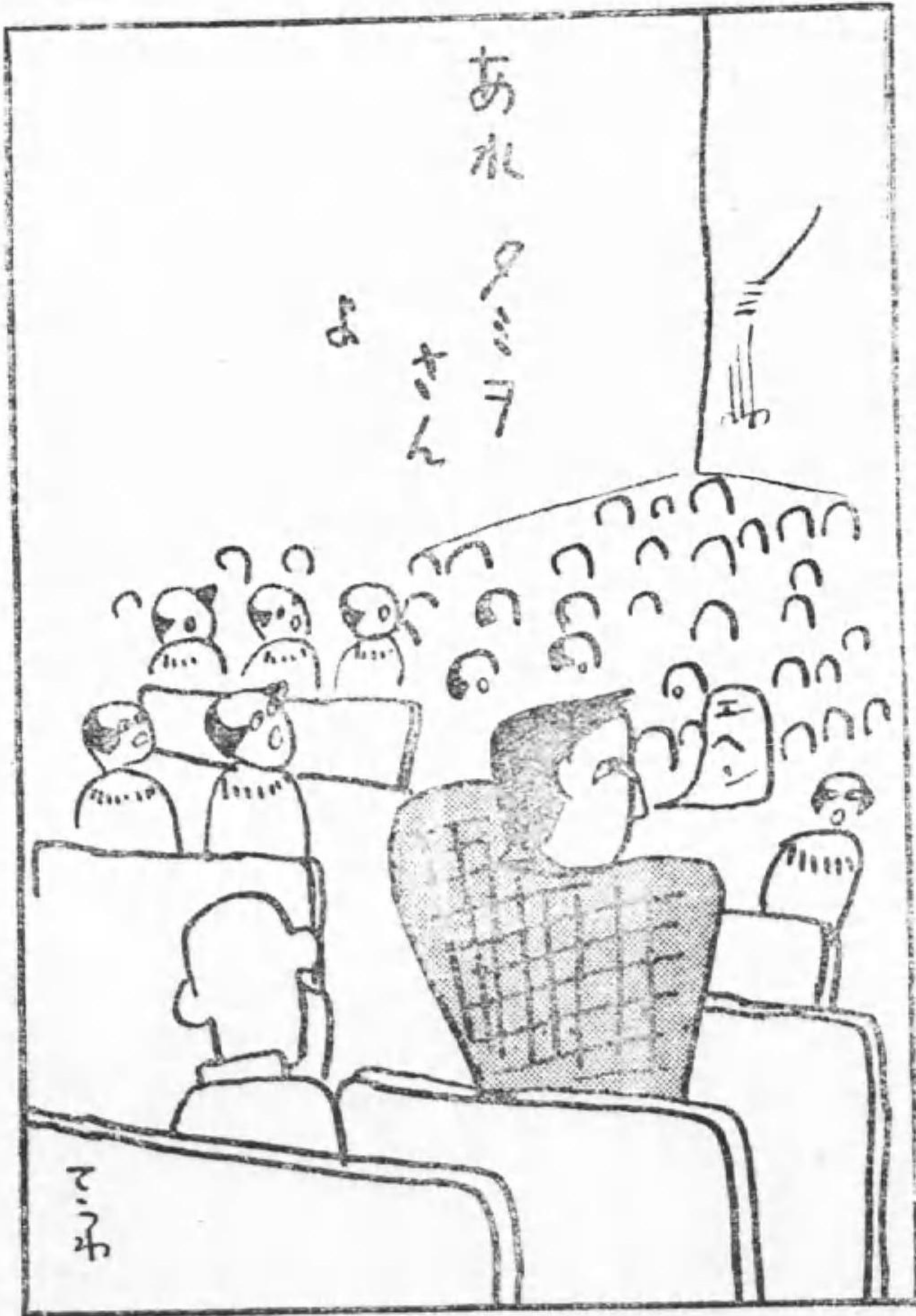
「僕？ いゝ天氣ぢやないか」

妙な返事である、否三等返事である。彼は君は？ と訊かれて一等とも二等とも答へなかつた、此處に僕と云ふものがゐなかつたら或は三等と有りの儘答へたかも知れぬけど、自分の估券上今僕の前で三等と答へることが威信墜失の恐れありと見做したものらしい。彼はチョット横を向いて、微かにく「しまつた！」と呟やいて軽く自分で自分の頬べたを叩いた、屹度生じつか自分で自分を窮地に導く様な質問をしなかつた

ら宜かつたと後悔したんだらう。

鶯谷で下りて上野公園を登つて行く、向ふから来る一紳士已の方を向てさも馴々しく御辭儀したから、顔には覺えがなかつたけど、屹度どこかで逢つた男に違ひないと、此方も外交的口吻を弄して、にこりとして『やア暫らく』と云ひつゝ帽子を脱いだ、その時菊池君もその男に向け『やア』と答へた。オヤと思ふて再び先方の紳士を見詰めてみると、その眼は何時しか菊池君に灑がれてゐた。

僕の早合點め『やア暫らく』も無いものだ、已れは菊池君や吉山君に氣極り悪さに、幾度も『本當によく似た男だ、男だ』と胡麻化して頭搔いた、知らず顔が真赤になつた、それを二人に見られるのが辛さに靴の紐を直す様子をして俯向いてやつた。



音樂學校前には今日を晴れと着飾つた若い男女が所々に群れを作つてゐた、屹度彼等の連れを待ち合せてゐるんだらう、げに美しき其れ等若人よ、姫君よ。三人の子持旦那諸君は心には異性の強い引力に惹かれながら、表へには差あらぬ風を装ふて校門を潜つた。

其處には幾十臺の人力車、十數臺の自働車が竝んでゐた、己れは始めて音樂會なるものゝ威力に驚ろかされた。此處にも彼方此方に美しき群れがさゞめいてゐた。

大玄關には多くの帝大の學生が受付けてゐた、それ等は美なると醜なるに係はず靴を接する數多の聽者を極めて懇慫に迎へた、その態度は町重に、また親切に、流石は常國最高學府の基督教青年會の連中は違つたものである。

指さゝるゝ儘に二階にあがり、導かれて講堂に入ると、一杯の人！それ等は總て中流以上の顔付を備へてゐた。これも嬉しさの一つであつた。ツカ／＼と入つて坐席を求めてゐると何處からとなく『奥野他見男だ』『奥野さんだ』と耳朶に響いて來るので、誰れだらうとヒョツと其方を見ると、多くの視線がバツと灑がれてゐるので、ポツと赤くなり隠れる様にして坐り込む。

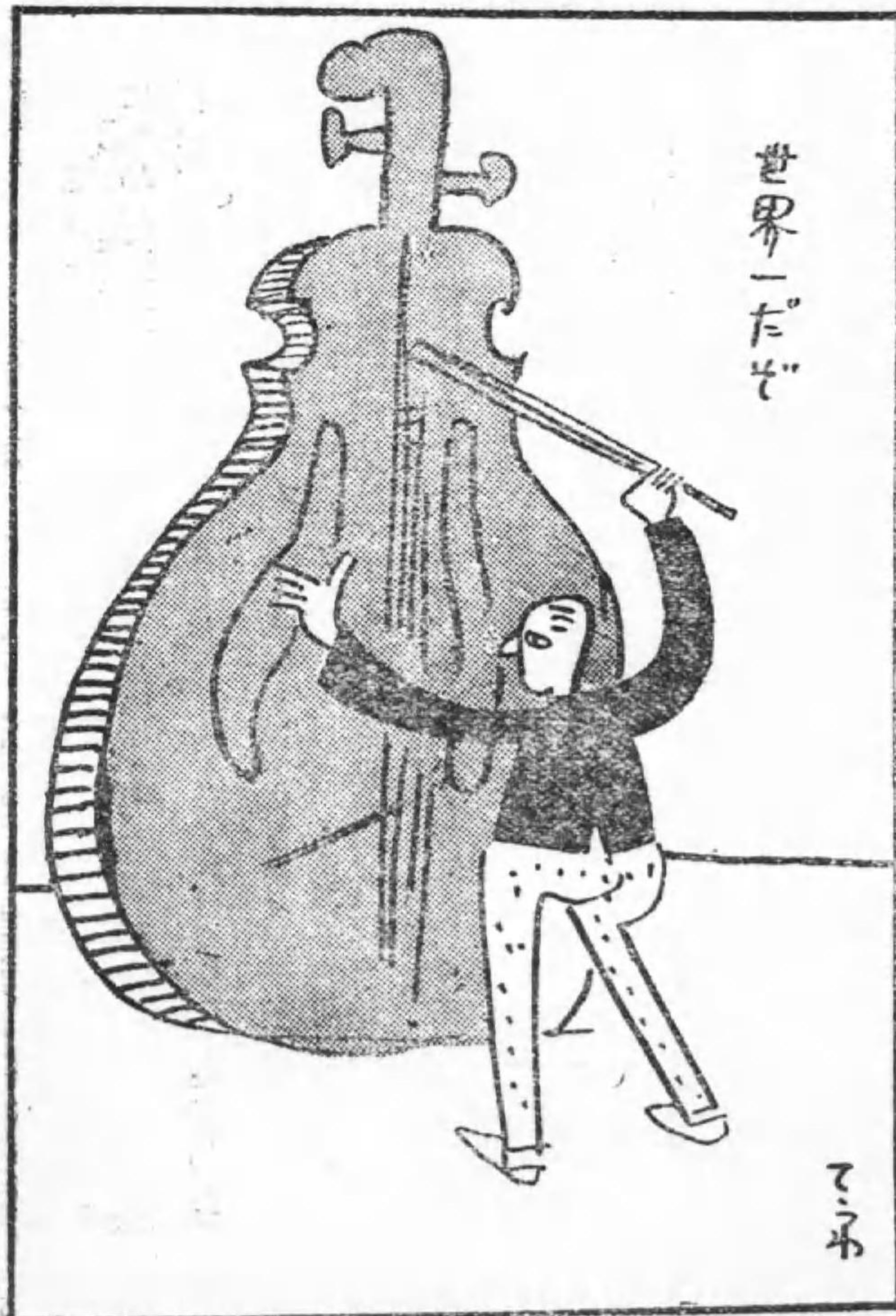
菊池君は何時の間にやら見えなくなつた、二人は強ひて其のことに就いては一言も及ぼさなかつた、互に心で悟る所があつた。

時間を見ると二時にまだ十分前である、誰れか知つた人がゐないか知らと彼方此方を見詰めてゐた吉山君、オヤと云ふが早いカスと立つた。何處へ行くんだらうと黙つて見据えてゐると、彼は懸て色淺黒けれど、

人品卑しからざる中年の奥様と挨拶を交換した、續いて又花の様な美人や、若い紳士とも睦まじい笑みを交換した。それから彼は屈み腰になり時々此方に向けてはヒソヒソと語つた。すると三つの顔が一時に己れの身邊に集中され、同時に穴のあく程見詰められた。なんだか知らぬが氣極りが悪かつたので、己れは己れの視線を他方へ外らした、そして程經てチラツと其方を見ると、矢張りさも驚いた様な眼付が此方へ灑がれてゐる、ハテ變だ哩と益々氣極惡さに今度は稍俯目勝ちになつた。所へ吉山君が戻つて來た。そして密つと己れの小膝をツ、いて、

「彼處にゐる奥様は吉野作造博士の奥様だよ、その向ふが奥様の妹さんで、男の人は僕の同輩だ」と囁いた。

ホーあの方が吉野さんの？ と云ひながら今度は己れの方から穴の明



世界一だぞ

てんや

く程見詰めた。互の視線はバツ／＼と衝突した。萬天下論壇の人氣を一身に集めた常國大學法科大學教授吉野博士を知らねえか。

「僕彼方へ行つて彼の人が奥野他見男さんだと知らしたんだよ、そしてらまア彼の方がと君をヂツと見詰めてゐたよ」

見詰められた原因が始めて解つた、それなら其れと始めから知らして行けばよかつたに、そしてたら己れはそれ相當の顔付する手配りがあつたものを。

「君を見て立派な方だねえと好評噴々だつたよ。」

「己れを立派ななどと……」

と卑下して見たものゝ俄かに悠然として湧立つ得意さは隠し切れもせず自ら雙頬に浮び出て内心「ヘン誰れの見る眼も同じだな！」

突然バチ／＼拍手の音が四方から鳴り渡つた、眸をあげると、正面左のドアを排して骨格逞ましき何國人とも見當の附かぬ外國人が背よりも高しと許り疑はれる大きなウバイオリンを持つて現はれて來た、二人の西洋婦人がそれに續いた、一人は随分の老婦人であつた。

茲で一寸己れとして云はなくちやならぬことがある、己れは今此處で「大きなウバイオリンを持つて」と書いた、これはチャンと名前があるんだ、だから少し此の道に通じてゐるものが此所を讀んだら「オヤ此の樂器の名を知らないのか、驚いたねえ」と嘲笑するかも知れない、嘲笑しても仕方がない知らないものは何處までも知らない、此處で知つたか振りを發揮して何々と書いたら、今度は至て音樂に素人の人は此處を讀んだら屹度何々何麼樂器のことを云ふんだらうと小首を傾げるかも知

れない、だから「ウバイオリンの大きい」と書いて居いたら大概の見當が附くだらうと思ふ。よもやウバイオリンを知らぬ不解屋も世の中には居るまいから。己れん所の洗濯婆でさへ知つてゐるぞ。

己れは勿論あとで吉山君に小さい聲で其の名を訊いた、吉山君は直ぐあれは何々と教へて呉れた、「アツさうか」と己れは如何にも其の時知つたか振りに頷いた、その癖家へ歸つたら何時の間にやら其の名を忘れて了つてゐた、己れとしたら餘ッ程音楽に對する智識が缺けてゐる、これでゐて自分で自分のことを常識の發達した男と定め込んでゐるんだから世の中は何日でも天下泰平だ。一寸脱線して失敬、早速本線へ復舊する。その外國紳士は場の真中に設けてあつた椅子に挫つかと腰を下ろし、靜かに大きなウバイオリン（セロ）を前へ下ろした、その様は恰も武者

振りのいゝ總大將見たいな風であつた。所謂楚々たる二人の婦人のうち一人はピアノに坐つた、一人は樂譜のめぐり役である。

小手調べが濟んだ、愈々大きなウバイオリンに世界一の手が觸れた、萬場素破とばかり聲を呑んだ。日本語の義太夫でさへ何を云つてるのか時として少つとも解らぬ己れに、プログラムで見ると己れの知つてゐる英語でもない獨逸語でもない屹度伊太利語か露西亞語か佛蘭西語か此の三ツのうちだらうと察せられる題目の意味が少つとも解らなかつた。上山君も之れには呆としてゐる、僕等の前に若い美しい妻君を連れて來てゐたM大學助教授君も同じくボカンとしてゐる、して見れば互は得體の解らぬ題目をさも知つたか振りに見詰てゐるに過ぎない。その多くの題目の中で一つ讀めるのがあつた、ロマンスと云ふのである。此筆法

で行くとローマンスと云ふのは日本支那を除いて萬國共通する語か知ら
不才淺學宜しく教へてくれ。

第一は始まつた、彼は熱心に彈奏した、その熱心さは時に顔にまで現
はれ、赤くなつたり青筋が額に隆起したりした、本人は如何にも『さア
どうだ感に入つたか』と云ふ様な顔付だつたが我等に少つとも反應は
なかつた。寧ろ聊か呆氣なさに來なければ好かつた迄に思ふた。間もな
く濟んだ、聽衆は單に應酬として一片の拍手を與へたのみである、彼の
姿の徹するや小言でお互に『わかつたかい？』『面白いかい』が始まる。
して見ると萬場至る所己れと同感の士が多いと云はねばならぬ、聊か意
を強ふする。どこが世界一流だらうと己れは内心疑問たらざるを得な
かつた。



再び彼は現はれた、拍手は前と同じく彼を迎へた。一同はさのみ今度は大きな期待を持たずに彼を見守つた、但し演奏者に對する禮たる静けさは流石に保たれた。

今度は前の高らけき樂音と違つて、或は高く或は低く響いた、妙味は次第々々に迫まつて來た、己れは俄かに坐り直して一糸も聽き洩らすまいと全身を稍前にのめり出して、滿身悉く耳にした。この時より聽者皆呼吸を殺した。

妙音は更に妙音を傳へた、思はず呀ツと愕然たる幾度か知らず、奏する手は神の手か、あの音はあゝ抑々人の業か、感極まつて己れは思はず身震ひした、あゝ藝術の力よ、世界一品宜なる哉、名手シコラ氏の名は此の時深く己れの頭腦に刻まれた。

萬人は殆んど夢の國にあるが如き心地になつた。げに名手かよ名手なればこそ。

シコラ氏其の人も自ら弾きながら、自らがその間の人となつて、さも感慨に堪えやらぬ風情を示してゐる、シコラ氏が樂器か、樂器がシコラ氏か夢我の様である、彈かんが爲めのシコラ氏に非ずして、思はず知らず彈かれ行くシコラ氏である、その自らが恍惚として聽き惚るゝ所、又得も云はれず、静かに、最後を弾いて暫し無念無想、聽て始めて我に返つた時の好さ。拍手は雷の如く鳴つた、流石は流石はと嬉しき動搖は至る所に起つた。最初に失望した反動は極度の敬虔の念と嘆美の叫びに化した。

それからの演奏は益々天下一品の妙味を極めた、聽者は酔へるが如く

其の神技の中に魂をしたらした。そして最後の彈奏が終つた時でさへ人々は其の糸の響きを暫しなりとも耳に留めて置きたいと思ふてか急に立上ることはしなかつた。

小さいどよめきの下に人々の足は自然に外へ運ばれた。彼等の眼にも顔にも盡きぬ歡樂の名残りが惜しまれてゐた。

若い紳士淑女の群れは次第々々に手に手を取つて暮れ行く上野の森の彼方に消えて行つた。

狂 亂

己れが夕方外から歸つて來ると、何時も夕飯の仕度をして待ち構へられてゐるのが、今日はその氣配だにない。さては何處かへ今まで家を明けて遊びに出かけてゐたと見えるな、聊かムツとして、妻に、

『どうしたんだ?』と空腹のムカツ腹を顔一杯にして云つた。すると彼女は如何にも落着いて『今日は拵へなくてもいいのよ、まア其變妙な顔をなさらず一寸之を讀んで御覽なさい』と差出されたのを見ると、眞白な状態の上に『西川他見男様、同御令夫人様』と水莖美はしく書いてある。ハテ何處から何を云つて來たんだらうと、ムラムラと湧き立つ好

奇心にわなゝきを壓へて裏を見た。「鈴木武志、同じづ子」と書いてある
鈴木君なら隣の住人だ、それから何處をと、萬身好奇心愈々そゝり
立つて遅しと許り披いた。斯うある。

冬の天地は美しく澄んで誠に心地よく存ぜられ候。御二方様御揃ひ御
機嫌うるはしく何よりの御事とおよろこび申上候。

扱過日私共愚夫婦病氣の折は温き御情のもとに御手厚き御厄介をい
たゞき、まことにうれしく有難く謝し上げ候。

今夕はそのお禮をもかね御飯さし上げた。存じ居候。山から海から
畑から珍味数々とり揃へ調理法にも一層の吟味を相加ふ可く候まゝ萬
障お繰合せ遊ばされ、六時頃より御空腹にて是非く御來駕下され度
願上候。

願上候。

餘興として例のはゞぬき會相催すべく候、お歸りには自働車の準備
もいたさせ申置候まゝお時間超越遊ばされ、ゆるくの御心組にて
お出で下されたく候、最後に時節柄御戸締の嚴特に伏して伏して申添
へ上候。

草々

すゞき

西川他見男様

同御令夫人様

同御愛嬢ちやま。

己れは之をほゝえみながら讀み終つた。

「だからよ、あたし少つとも夕飯の用意をしなかつたのよ」

「ウム」と云つた切り己れは默念としてゐた。

げに面白き雅懐である、彼は隣人である、常ならば一寸足駄履き庭傳ひに遣つて来て「今夜御馳走しますから被居いな」と云はれ得べき筈である、然るに隣りに住んでゐながら殊更筆に事寄せて、斯くある。妙味は茲だ。口で云はれたら口で「ハイ」と返事するのみである、交渉はそれで終りである。何等の情味、何等の雅致がない、平淡々たるものである。然るに斯うして先づ墨痕淋漓たるにはあらで優美掬すべき水莖を以つて、然かも其の中に諧謔を含めて、恰もそれ招待状に似せて招待状にあらざる所、隣人の慕しみを漂はせ、云ふに云はれぬ柔かみが浮いて來る。

己れの心は自然に躍動した、己れは其の晚是非行かねばならぬ用事が

あつたにも係はらず喜び勇んで妻と二人で出かけた。

「來ましたよ」と云つて己れは戸を開けた。

「サア何卒」と彼等夫婦は迎へた。

食卓は既に文中にある「山から海から畑から」の名文通り卓上に狭しと許り竝んでゐた、二人は早速其處へ坐を強ひせられた。我が愛嬢静ちやまも勿論招待された一員として憚りながら御年二才ながらも正當なる権利の下に坐蒲團一枚の主人公となつた。

「オイ君も此方へ來たまへ」と鈴木君に呼ばれてハツと神妙に一隅に佇む青年がゐた、ウムこの青年だな昨日鈴木君が話してゐたのは、己れはチット眼を据えて見た。

昨日鈴木君が己れの家へ遊びに來た序に斯う云ふ話をした。

一昨夜もう遅いから戸締をしようと思ふてる時、名も知らぬ見も知らぬ一人の青年が訪ねて来た。そして何卒お宅に置いてくれと云ふ。漸次訊ねると、青年は鈴木君と矢つ張り同じく福島縣の者だと云ふ。そして鈴木君の父が或る所へ遊びに行つて色々話をしてゐた時、又その息子の所へ遊びに来てゐたのがこの青年であつた、その際話に鈴木君のことが出た。こりや矢つ張り立身出世するには東京に限る、だと云つて何處にも知合がない、サテこそ顔こそ知らぬが兎も角もと、故意々々たよつて出て来た次第だと云ふ。

「そして何うしたんだ、斷はつたのか、それとも置いてあるのか」と己れは訊ねた。

「置いてある」と鈴木君は答へた。

「何うする積りだ？」と重ねて己れは訊いた。

「ま、當分あゝして置くんだけね」

と鈴木君も重ねて答へた。

己れは其の時云つた、其塵者は己れも経験してゐるが之からドシドシ遣つて来るに違ひない一々「さうか、それなら」と一二もなく承諾したら限りがない、宜しく適當に處分するんだねと入智慧した。

「ま、あゝして置くさ」と流石はクリスチャンだけに鈴木君は窮鳥懐に入ればの雅量を示した。

「一體兩親の承諾を得て出て来たのかい？」

「さア何うだか、そこまでは未だ訊かぬが。」

「承諾を得て来てゐるものでないとすると後が面倒だぞ、僕ならば」

と又意見を云つた。

その儘になつて別れて了つた。

その青年である、今芋畑から泥を拂つて出て来た許りと云ふ様な所謂田舎の青年らしく見えた、卒直にして微塵も浮薄らしい様子が見えない己れは小さい聲で囁いた。「まア育て、見るんだね、ものになるかも知れないよ」

鈴木君は又青年をうながした、又うながした三度目に如何にも見るだに氣兼ね々々して漸く机の一角に身體を縮める様にして坐つた。

「さア喰へませう」と云ふ鈴木君の相圖に一同は箸を持ち上げた。

食事は一時間に渡る長さを費した。それ程食卓は賑かであつた。

「さア、そろ／＼トランプを始めませう」と云つてる所へ來客があつた



本客はそんな
筈に腹着な
どつかと座つた

一寸トランプがオチャンになる、妻君連早くも見合はして苦い顔、その眼の中には早くも碁が逆立してゐる。

來客は其塵箒に頓着なく悠々と坐つた。その坐りたるや「己れが一逼斯う腰を下ろしたが最後三時間でも四時間でも動くもんか」と云ふ下ろし振りであつた。その様子を見た己れは女房共もう断念て了へと云ふ言葉の代名詞として、

「碁を打ちませうか」と云ひ出した。

「碁？ ウン碁を打たう、幸ひ此の人も旨いんだから。」

斯うなると折角の「餘興として例のばゝぬき會相催うす可く候」が滅茶々々だ。妻君連は今はいはこれまでと諦さらめてか、さして厭な顔もしない。唯彼女等は自然の裡に退室せざるを餘儀なくされたのに心平な

らず遙かに長火鉢で相對しながら「随分だわ、随分だわ。」

碁と云へば己れは今面白味の骨頂に達してゐる最中である、但し負けて許りゐる。一體己れは小さい時から此の碁と云ふものは大嫌ひであつた、ピタリと坐つた儘二時間も三時間も碁盤を圍んで「此の石を斯うして」が何が面白いだらうと思ふてた、碁はもう年寄りの仕様事なしの暇潰しに限るもの、我等須らく奮起せよまでは上出来だつたが、その奮起が芝居道樂ぢや折角の須らくが何んにもならぬ哩。

兎に角己れは碁が嫌ひであつた、見るだにゾツとした、友人仲間碁なんか打つ男はそれとなく嘲笑して見てゐた。

所が茲に鈴木君の所へ大橋と云ふ人がよく遊びに来た、彼等は相見たが最後必ず碁盤を持出さねばならぬかの様に思ふてゐる、己れがよく訪

ねる其の度にもう二人は宇頂天になつてゐる、あ又始まつてゐるナと其の度毎に己れは苦い顔をする。そして歸らうとする、「も、も濟みますから」と止められる、それぢやと澁々坐る、見ないで置かうと思ふてゐても「何が其變に面白いのか」と許りツイ釣り込まれて眼を据える様になり出す、お互は圍みさへすればいゝと云ふ圍碁早解り法を授けられて見てゐると、成程一方は重圍に陥りながらも巧みに一方へ血路を見出してホツとしてゐる手配もある、かと思へば又一偶に矢盡き刀折れ無殘グツともスウとも身動きもならぬ破目に陥つてゐる所もある、成程々々と見てゐる裡に戦ひが次第に終りに近づき、聽て敵味方は攻撃の場所もなく手も足も出せなくなつてくる、然らするともう濟んだと一方が云ふ、濟ましたナと他の一方が答へる。それからダメとかアゲ石とか云ふ言葉が



ハハーンとか
フフーンとか
何か面白いな

出る、此の言葉が出て来ると後は何が何やら解らなくなつて来る、勝手にドンドン石を入れて、勝手に又石を取上げるんだもの。そして負けた勝つたが始まる、何が何だい。その何が何だいを屢々己れは鈴木君を訪問して屢々大橋君との勝負の済むのを待ち設けてゐる裡に何時しか了解することが出来た、『ハ、アン』『フム』まで進歩した。

この進歩こそ己れをして碁盤に近づけしめた最大原因である。或日何心なく『面白いもんですナ』とフと口走つた。すると『何うです、一番遣つて見ませんか』と、間髪を入れず薦められた。

『イヤ何うも私は』と己れは尻込みした、それには自分が兎ても及びも付かぬと云ふ半面に隠性的に碁に對する長年の憎惡の念が夥だしく含まされてゐた。

『ま、一遍遣つて御覽なさい、たゞ圍みさへすりや好いんですから難かしくも何もありませんから。』

己れは難かしいものだから手を付けられないだと思はれてはと其の時妙に反抗的氣分が萌し出して來た。それに野球にしろ玉突にしろ勝負事に興味を持つてゐる先天的の己れの性分は切りに内から『構ふもんか遣つて見る、遣つて見る』と囁いて來た、厭だ觸つてはならぬと重い掟の如く守つてゐた己れは此の時無意識に毛蟲の如く嫌つてゐた石を掴んだ、そして『ぢや教へて貰ひませう！』と到頭吐いた。覺えたら最後己れは其れに没頭しなければ承知の出來ぬ凝り性であると云ふ弱點を知りつゝも既に掴み、既に今やピシリと一石放つた、あゝ止みんぬる哉。それのみならず屢々『碁を止める』と鈴木君に忠告してゐた身が今度は却

つて忠告せらるゝ、運命の一步を踏み出したと云ふことは何たる情けない事であらう。己は鈴木君に屢々云つた、君の横隣りの文學士も著述に従事してゐる、僕の隣の猪狩教授も己れも著述に従事してゐる、又少しく向ふへ行つて逸見法學士も矢張りさうだ、云はば此の町の大半は我々として筆に親しんでゐる、君も君なんかの生産的のものは止めたら何うかと云つた、猶妻君にも主人をして詰らぬ君などに夢中させず其處は丈ます黒髪の偉力を以つて隣の西川さんを見做ひなさい、隣の浮田さんをお眞似遊ばせと聲涙併せて苦諫するんですねと迄ッ、いてゐたんだ。

その己れだ、その己れが『ぢや一番』と乗り出したんだ、抑々なんの顔ありとする。

果して己れは己れの性分を豫想してゐた通り翌日から『鈴木君一番』

と我れから乗り出して行つた、その度に木ツ葉微塵にシテやられた、人に負けることの口惜しがり其れなら止めて了へばいいんだけど、日に増し上達の跡著しいものがあると云はれていゝ氣になり、モ一番モ一番だ。そして今日が日まで碁と云へば顔を顰めてゐた僕が、何時しか碁と云へばホツと雙頬を崩して乗り出す様になつた、何たることだ、そして更に曰く『世の中に此麩面白ものは無い哩』とは益々以つてあゝ何たる事だ、洵に以つて聲涙共に下る昨今の状態と云はねばならぬ。

退歩か、進歩か、見よ西川他見男は今その來客と相對してビシリビシリと打つてゐる。

静ちゃん

己れは己れの子供（彼女は常年二才）を奇蹟の様に思ひ、丸い眼玉を張りむいて見詰めてゐる。己れは人間が生れ落つるより次第々に大きくなつて行く徑路の今や其の最も驚異に價する幼な時代と云はむよりも赤ん坊時代を奇しき眼で見えてゐる。

例へば木の實が地を割き出で、一葉となり二葉となるが如くに人間の腹から出た赤ん坊は乳呑み術を最初に、聽て笑みを覚え、次第に這ふの術を悟り、歩みを發見し、茲に口を動かすの術まで來る、其の次第々に人間に形造らる可く進んで行く總ての作用が一として首肯されざるは

ない。斯うして育ち、斯うして生長して聽て娘になり、母になり、婆になり、了ひの果てが『さらば御免候へ』となるのである。樹木が二葉より出世して幹となり枝となり、聽て實を結び、花を咲き、終には枯木となるに比して幾許の相違がある？

己れは己れの子供に就いて特に奇蹟的に感ずるのは親しく遺傳と云ふものゝ怖ろしさからである、それは己れの子供（静子）は生れ落つるから殆んど百人の赤ん坊が百人喜ぶ筈の玩具を見向きもせぬ、何故か彼女は碌に歩けぬ時から筆持つを喜び紙に向つて字とも繪とも刷斷付かぬものを書いてゐる、それが如何にワツと泣き立てゝゐる時でも一度び筆を見せると嬉々として飛んで來る、そして何か書いてくれと強請む、其の通りにしてやると夢我夢中になつて喜んでゐる。確かに之れ筆もつ己れ

の血筋が何時しか傳はつたものと見える、若し今より筆に親しむ素質あらば彼女や必ず閨秀作家として世に現はるゝであらう。我が子ながらその採る可き道が賞めていゝか悪いか見當が付かぬ。

彼女は又歡喜の際は聲を上げて唱ひ、珍妙ながらも手足動かして自ら音頭をとつて迄その表情を表はす、どこで此慶具合な表情を覺えたものか其れが不思議でならない、自然に人間が覺えるものであらうか、然らざれば之れとても己れの遺傳と見做さなくちやならない、己れは感興至れば手足の舞ふ所を知らずと云ふ癖がある、それと酷似か。

似てゐるのは其れ許りではない、或時は斯くの如く大に唱ひ、或時は靜かに沈思するあたりから一遍自分の云ひ出したことは飽く迄も通して見せると云ふ點まで何うして斯うまで傳はつてゐるんだらう、その癖が

此の己れの此の年の分別盛りでさへ直せないんだもの、何うしてそれを叱る権利があるもんか。己れは總ての行動を黙つて見てゐる、ツイぞ嘗て叱つたことがない、いつも我が子の爲めには身體を擲つばかりに愛着してゐる、他人は云ふ妻は云ふ『貴方見たいにして置くとは何變者になるか解りやしませんよ。』放つておけ、放つておけ、幾程悪くけつまついても遺傳の力で此の己れ位迄にはならう。

妻の此の子を育てる理想は年頃になつたら先づ御茶の水女學校に入れるんだと云ふ、然うすれば幾程醜ともない顔してゐても、數多の美人の中に置けば自然に同化して生れ變はつた様になることは水瓜の受合だと云ふ。

それからの靜子は本人の自由意志に任かすんだと云ふ、『生じつか閨秀

作家など、大それた望みよりか好い良人を見出して呉れた方が何變にい
 いかも知れない、ねえ静ちゃん」と云つた。静ちゃんは唯眼を丸くして
 ゐた。女と云ふものはよく口も利けぬ者を掴まへて勝手なことを云ふも
 のである。

静ちゃんは近頃「とうちゃん」と呼べる様になつた、間がな隙がな「と
 うちゃん」である。己れは今黙つてゐるが、彼女が一人前に口を利け
 る様になる頃を見計らひ「とうさま」に改革させたいと思ふてゐる、そ
 うすると譬へ人間が同じであつても「ちゃん」と「さま」に依つて人品
 自ら異なる點があるんだ。

彼女はまた「かアちゃん」と云へない、「かア」及び「ちゃん」は別々
 にしては發音するが、連続することが出来ない、いくら教へても目下は

駄目である、彼女は何時も我等夫婦二人が口を酢つぱくして「かアちゃ
 ん」を教へても、「自然が時を齎すまで」と云ふ顔で勿ね付け、寧ろ我れ
 に此の語ありと許り突然に「とうちゃんよ。」それには我等夫婦刃向ふ術
 もなく「お利巧だよ、静ちゃんお利巧だよ。」

静ちゃんを最も愛してくれる者は隣の小父ちゃんである、小父ちゃん
 は静ちゃんを稱して「天下第一の愛嬌者」と云つてゐる、所が情けないか
 な「をぢちゃん」の發音が未だに出来ない、だから小父ちゃんも亦お父
 さんの一員たるの光榮を有して「とうちゃん」と許り飛び付いて行く。
 そしてポツポと強請まれる、ポツポの畫を書いてくれとの註文である、
 よし／＼とお父ちゃんは机の前へ連れて行く、そして書いて見せる、ポ
 ツポの畫は小父ちゃん拙手つぺである。

静ちゃんは今頃自覚を持つ様になつた、少くも今では自分でも年長者であるぞと云ふ誇りを持つてゐる、その證據には小父らやん所の赤ちゃんを見ると、それこそ紅葉の様な手で頭を撫でたり、おん年二才の癖に抱つこしやうのおんぶしようのとする、赤ちゃん君泣出したりすると如何にせば之を賺す可きかとコクリと考へて、聊か途方に暮れてゐる、そして若し小母ちゃんが赤ちゃんにおツ乳を呑ましたりするもんなら其の時こそ折角の年長者たるの自覚が代無しになつて、我も人の子なりと許りおツばい〜と叫んでお母さんの所へ飛んで行つて、「乳房は獨り赤坊のみの占むるものにも非ず」と許り吸ふてゐる、その刹那は静ちゃんに云はせば『我が懐しき赤ン坊時代』である。

赤ン坊の静ちゃんは今朝無理な註文をお母アさんに提出した、それは



乳房はひとり赤ン坊のみの
占むるものにあらず

てうわ

お母アさんにもお乳を呑めと云つたことだ、それにはお母さん一二も降参して和議を乞ふた、が静ちゃんも遺傳特有の思ふた通りを履行させねば止まなかつた、仕方がないのでお母アさんは一回二回試みた、然し何うしても口には届かなかつた、静ちゃんは無理にもそれを通せと手眞似した、三度目に漸く乳房が、辛くも唇の入口まで来た、その時お母アさんは平生静ちゃんの尤も好むおっぱいなるものゝ味は何物だらうと序でに一寸嘗めて見た。嘗めて見るが早いか顔を顰めて『甘い』と云ふが早いかベツ／＼と外へ吐いた、それが如何にも面白いと許り静ちゃんは高らかに笑つた、して見ると静ちゃんも隅に置けぬ悪戯者である。静ちゃんの最も恐がる者は『お獅子』である、嘗て此の町へ越後獅子がやつて来た、懸て家をあけて入つて来た、そして見るだに凄顔付の

獅子の面をオツ被つて躍つて見せた、獅子の眼はいかり輝き、口は耳までも裂け、髪は眉間を埋めてゐた。

静ちゃんは生を此の世に享けて二ヶ年、未だ嘗て斯くの如き物凄い者を見たことがない、此塵者が世の中に住んでゐるとは知らなんだ知らなんだと許りヨ、と悲しみ叫び泣きに泣き立て殆んど狂する位であつた。獅子去つての後二時間許りと云ふもの、殆んど身體を震はして母に獅子み付いてゐた。

だから母は時々こらしめの爲めに『そらお獅子が』と威した、その度に静ちゃんは『ン？』と云ふが早いか其の時までの元氣な顔色もなく唯ワーツと泣き立てた。だからお獅子は母には静ちゃんのお悪戯を凝らしめる唯一の武器であり、静ちゃんには此の世に於ける最も怖ろしきもの

の名である。

可愛い、静ちゃん、それは今お母アさんに抱っこされて三越へ行つたさぞニコ／＼して歸つて來るであらう、さぞニコ／＼して歸つて來るであらう。

父にも母にも小父ちゃんにも小母さんにも最も可愛がられてゐる静ちゃん、お前は幸福者である。

初見参

己れは東京に永らく住んでゐるが、品行極めて方正、ヘン未だ吉原を知らないんだ、それをさも得々として友人連に話をする、彼等皆口を揃へてそりや人間が開化けてゐない情けない男だなアと賞める所か却つて侮蔑を以つて己れに向つた。己れは『ウン?』とひらき直ると、『一體吉原は東京の名物中の名物だ、而かも君の様な筆採る男で知らぬと云ふことがあるもんか、大に見聞を擴めなくちや何うする! 外國人でさへ吉原と云へば、ン、ン、ン、居るありますと知つてるんだ、何も吉原を知らぬからて君子顔する必要は何處にもありやしない、どうだ己

れの云ふことが解つたか？」
 と、知つたか振りの寺田奴、滔々として吉原大に知る可からず論をまくし立てた。「それも然うかな」と彼の理論も一理ありと認めただので兎も角も賛成はしたが、さりとして進んで行つて見たいなど、云ふ氣は起さなかつた。

所がふとした動機で己れは「行つて見よう！」と云ふ氣がフイに思ひ立つた。それは三日前に今米國のケンブリッジ大學に留學してゐる清田理學士から次の様な手紙を受取つたからである。

前略、多くの米國の青年は僕と口を利き出す様になつて來ると一様に吉原とは何處所かと尋ねられ、御承知の僕とて閉口頓首、見たこともないことゝて話の仕様も御座無候、これが君であつたら充分なる經驗

を積んでゐるだらうし、それに、獨特の面白味を以つて大に彼等を喜ばし得ることゝ存じ候。我等如き本ばかり讀んでゐるのも考へものゝツクゝ思ひ申候。

この最後の文句がピリツと來た、あの篤學溫厚玉の如き人格の清田の口から『本ばかり讀んでゐるのも考へもの』と來たんだ、それに己れだつて何處機會で洋行せぬとも限らぬ、その時に若し日本人にして吉原を知らぬと返事してフンと毛色の變つた連中から侮られて堪つたものか、殊に歴史の上からしても大に研究する價值があるんだ、徳川時代の遊蕩的な氣分を探る上に於ていゝ參考になるんだからねえ。

願くは唯それ好機御座んなれだ。

斯う云ふ時には得て悪友が旨く訪ねて來るものだ、果して然う決心し

てから五日後、偶然或る知名の畫家寺田（特に此の際假名にして置く）がやつて来た、恰度それが夕方であつた、一言二言座敷で話してゐると彼は『夕飯が済みましたか』と己れに訊いた、『いゝやまだ』と己れは答へた。すると『ぢや何處か其處等あたりで肉でも喰ひませうか』とお出でなすつた。その時は既に己れの家では夕飯の用意が出来てゐたが、生憎突嗟の來客であつたので、客分のを用意する暇がなかつた、で今から拵へさせても遅くなつたりするからと『よしッ』と彼が誘ふが儘立ち上がった。

『オヤ貴方御飯を喰がらずに何處かへお出ましになるんですか』と妻は折角苦心慘澹して拵へ上げた妾の手製が無駄になるのかチエツ口惜しいと半ば燒糞氣味で詰つた、それを聽いて寺田君は妙な顔して己を見上げ

た、己れは『オイ一寸此方へ來い』と妻を別室へ連れ込み、故意と小さい聲で『寺田君と一緒に飯を喰はうと云つてるんだから交際上仕方がないぢないか、でないとお前は今から客用の御膳を誂へるんだ、いゝか、厄介だよ八百屋へ走つたり魚屋へ行つたり。今一緒に出たら其麼手數は一切省けるから却つて結構ぢやないか、よ、どうだ、それとも家で飯を喰はうか。』

と暗に己れはそれは却つてお前は面倒だらうにと云ふ口吻を見せた、果して女房は旨くそれに誑らかされて、

『ぢや外へ行つて被居いな、でもお早くお歸りになるんでせう？』

と平生の寺田が寺田だから、その寺田と己れが一緒に出るんだから大に疑はし相にして念入りに訊いた。

「勿論早く歸るよ、なアに小一時間と経過らないだらう。」

「ぢや行つて被居いな」と茲に始めて認可證が下りたので、締めた締めたと許り再び座敷へ戻つて其れとなく眼で満悦の溢えを寺田に通ずる、寺田はニコツとした。

二人は妻の變な眼付に送られて外へ出た、外へ出たら天下は二人の物だ。俄かに大聲になつて人生至る所美人あり、奚んぞ妻のみに汲々せんやと傍に本尊がゐないと見えて意氣軒昂、時々寺田は「僕の家も嬬天下だが、君の家はヨリ多く嬬天下だナ」と己れに浴せる、同病まことに相憐れむ。

二人は懸て四谷まで電車に乗り三河屋牛肉店を潜つた。手を叩く、肉が来る、酒が出る、二人は程經て満腹の體で揚々としていゝ氣持ちにな

つて外へ出た。

「君、歸るか」と寺田は己れに聞く。

「何んだか歸りたくない、折角の此の酔を如何せんやだ。」

「同感だね、ぢやブラリ〜散歩しよう。」

「ウム。」と己れは愉快に頷づいた、二人は期せずして明るい光りの下をゆたり〜と運んだ。時々ピタリ〜と美人に出會す。フと寺田は何を思ふたか今から何處かへ行かうよ折角の此感興を此の儘にして了ふのは惜しいと云ひ出した、素より己れは異存ある可き筈がない。

「賛成ッ。」

「よしッ、ぢや吉原へ行かう。」

「吉原へ？」

と己れは急に尻込みして、

「待て待て、今日は不可ぬ。」

「何故？」

「此處から吉原まで大變な道程だ、今行つたら兎ても今夜は歸れさうもない、それに今日の己の妻の眼付を見たかい、悉ゆる疑惑の眼付を以つて二人を睨んでゐたぢやないか、だから一層行くんだつたら明日行かう然かも晝行かう、晝遊びと洒落ようぢやないか。」

黙つて聽いてゐた寺田は手を拍つて、

「君は仲々隅に置けないね、イヤ其方がよからう、オイッ一寸握手」

と彼は己れの手を確つかと握り占め、明朝十時を期して上野ステーションで待合はすことを約束して二人は聽て左右の電車で別れた。

約を踏んで翌日己れは上野ステーションの待合室に全で一等室の旅客見たいな顔を作つてそれとなく待つてゐると、寺田君がキヨロキヨロして這入つて來た。

「オイ此處だよ」と大きな聲で注意すると、ハツと氣が附いて「やア」と云ひながら、殊更に「まだ汽車の時間は早すぎたなア」と四邊に聞えよがしに云つて寄つて來たから、己れも故意に聞えよがしに「少しその邊を散歩でもしやうか」と調子を合はせて立上がり、二人は微塵も恥かしくもない眞晝中から吉原へなど、云ふ様な大それた陰謀を抱いてゐる様な素振りを見せず、揚々たる態度で構外に出て、

「今の頓智は活きてゐるぞ」と互に互を賞め合ひながら、サテ急に四邊に人なきを見計らひ、

「自働車で乗込まうか。」

「ウン、よかる、彼處に運轉手の控所がある、君が云へ。」

「僕かア」と寺田君は頭を拖えて、

「僕かアどうも。そりや軽い調子の君が云つてくれなくちや。」

「イヤ僕よりも君の方が口が旨い、ナニ思ひ切つて云ふのさ、平氣ぢやないか。」

「あんまり平氣でもないんだよ。」

と、頭の毛を撈る様にして、

「此の役は何うしても君でなくちや。」

「いや逆でも僕には。」

と互に平生に似合ない譲合ひばかりに暫し時を移す。これでは何時果て

しが盡くものでないと遂に同時に口を切る様に一決して、二人は足竝揃へて控所へ進み寄つた。と二人は呀や口を切らむとして急にモグ／＼させ、テレ隠しにストラツキで地面を小ヅキながら、互に小さい聲で「云ひ難いなア。」

決然己れは思ひ切つて云ひ出した、決然とは云ひ條、何故か咽喉に痰が一杯からみ付いてゐる様な聲になつて、少しく震ひさへ帯びて、「自、自、自働車が空いてますか。」

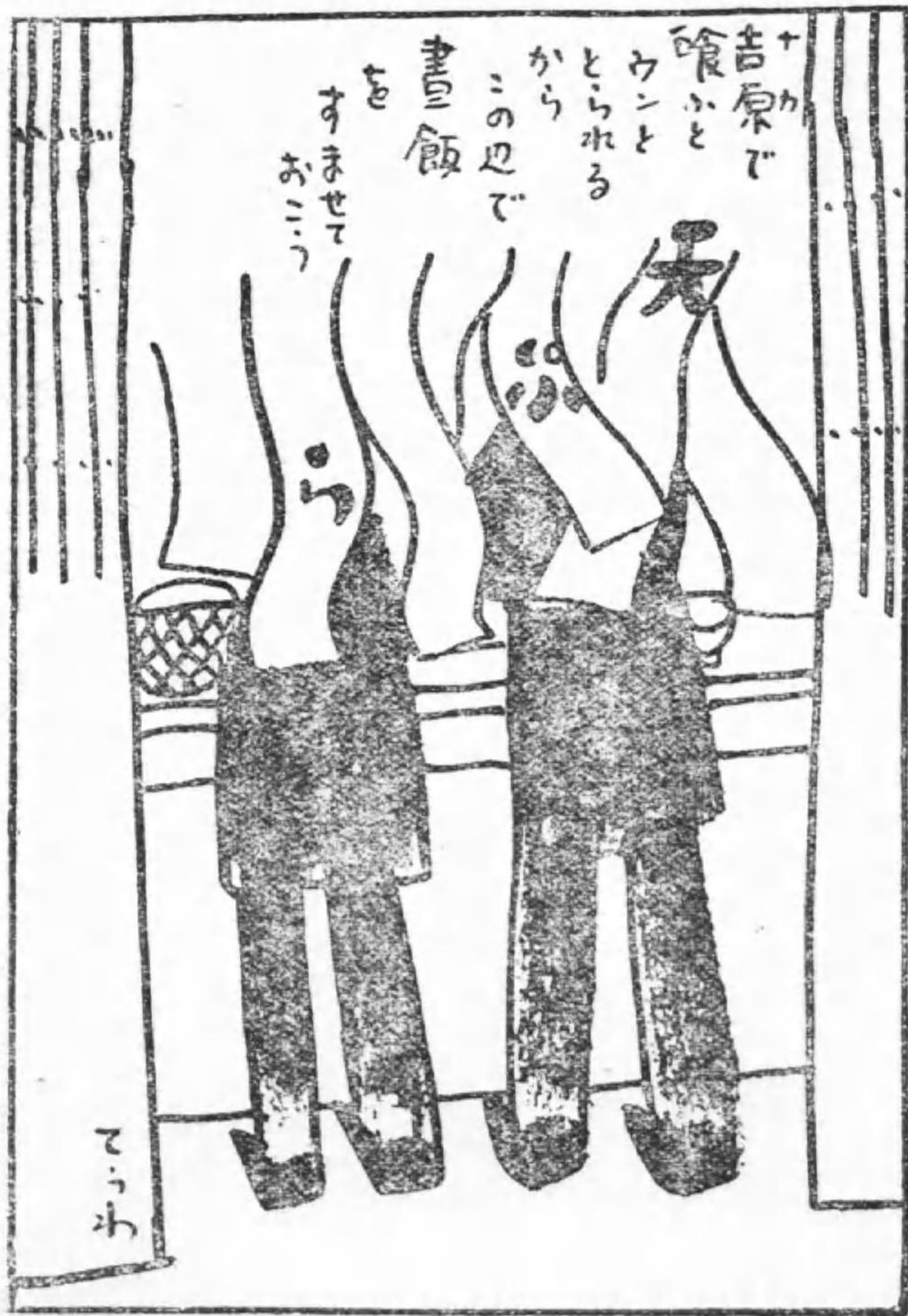
多くの運轉手等はデロリと二人を見たその裡の頭らしいのが、

「へい、只今お生憎さま、御覽の通り皆塞がつた許りですから。何分急にポツリ／＼と降り出したものですから客がドツと押しかけて來たので。」

なんだもう無いのか、無いと知つたからにや誰れに遠慮があるものか、地面を小ヅキ廻はす藝當なんか少つともありやしないと急に大きくなつて、今度は急に態度が見上ぐる許りに鷹揚になつて、

『麴町一番町まで行くんだになア』と故意と聞えよがしに云つた、一寸云と麴町一番町は殆んど大臣町と云はれてゐる位大臣が多く住んでゐるんだ、己れは突嗟に虚勢を示す爲めに斯う云つて相手をそれとなく威嚇した、そして『チエツ仕方がない、それぢや』と云つて蹠を廻らした。

折柄ザツト雨が降り出した、二人は周章狼狽して、それッ何は兎もあれ電車へ電車へと我れ先きにと駆けた、生憎來る電車も來る電車も満員であつた、漸々乗れた時分には二人は總身ズブ／＼に濡れてゐた、おまけに急な寒氣でガタ／＼齒を震はし、それでも瘖我慢の強い二人は『よ、



吉原で喰かど

ウソととられるから

この辺で書き飯

すませておきなう

てっめ

よ、よし原は、ひ、晝に、か、限るんだよ！』

それから二人は雷門まで運ばれた、厭でも應でも吉原へ行くには此處で下りなければならぬので、雨の空模様を情けない顔をして見上げながら、不承不精更に此の上この晴着を濡らすのかと泣く様な顔をして下りた。そして慌て、他人の軒下へ駆け込みながら、聲を揃へて『どむしやうく。』

時計を見ると十一時半だ。

寺田は己れの袖を引つ張つて、

『吉原で飯を喰ふとウンとボラれるから何處かその邊で晝飯を少々時間が早いのが済まして行かう、その方が安あがりだから』と急に經濟論を振り翳した。

『だけど己れは少つとも腹が空つてゐない』と僕は返事した。

『己れも少つとも喰ひたかアないんだ、然し無理でも詰めて置かなくちや先方へ行つてから空り出して、我慢仕切れなくなつて一言飯と洩らしたのが最後大變なことになつて了ふよ、だから無理を無理してゐても今喰つて置かう、ウンいゝことがある、深呼吸するとスーッと腹が空るものだから、だから一ツ深呼吸をやつて見ようぢやないか』

『ほんとかい？』

『ほんとだよ、』

『ぢや然らしよう、一二の三だぞ』

と云ひながら二人は呼吸を合はして軒下に蹲んだ儘スーウ、フーウ、スーウ、フーウ、斯くすること七八回。

「どうだ、減つたかい？」と寺田は尋ねる。

「減つた様にも思はれるが……然しあんまり效能顯著と云ふ具合でもなしナ。」

「そりや君が拙手だからだ、斯う云ふ具合に、見とれよ、スーウ、……解つたかウンと胸を張らなくちや駄目だよ。……ウンそら、そら。そして今度はフーウと吐き出す時には少し身體を前へ屈む様にして」

「斯うか」

「ウン」

「フーウ」

「五六度遣つて見ろ」

己れは暫時脹れたり縮んだりした。

「どうだ減つたかい、感心したろ」

「あんまり感心もしないナ。然し此麼無駄時間を費してゐては貴重なる晝がフイになる、兎に角喰ふものは喰つて行かう、よか樓へ行こか」

「よか樓？ 高價いよ」

「ぢやどこに……どこでもいゝ飛び入つた所にしやう」

と二人は軒下を出て、駈ける様にそれからそれへと軒下潜りをやつてゐる裡にヒョックリ天ぶら屋の前へ出た、と突然に「入らつしやい」此の「入らつしやい」は利いた、二人は恰も自然に引ずられる様になつて二階へ上がった、天ぶら屋とは云へ大きな家であつた。

そこで何だか急がされる様な気持ちで中飯を済ませてゐる時、雨は小歌みになつた。ヤレ助かつたと二人は幾分の安心で外へ出た。

『自動車に乗らう』と寺田は云ひ出した、餘ッ程彼は豪勢振り見せたさ
に出来あがつてゐる、その癖彼は天ぶらを先刻お代はりをしやうと云ひ
出した時には『止さう〜』と止めた。彼の經濟論は要するに滅茶苦茶
だ。

二人は雨あがりの泥濘の地面を着物にウントコサハネを上げながら電
車か自動車か車かと區々たる右顧左別の論談にけりを附け得ず頭吾妻
橋際まで歩いた。

『どうしやう』と己れは云つた。

『自動車が矢つ張り一番いゝ』

『それぢや左様しやう、然し……』と云つて己れは四邊に眼を配り、

『見當らないぢやないか』

『なアに彼處まで歩いたら』

と指さす方は近い、又もテクツだ。

其處には生憎一臺もなかつた。今し方三臺程出ました許りですから、
何時頃歸つて来るか一寸解りませんと云ふ。然し早ければ廿分位經ては
歸るかも知れませんか、なんならお待ち下さつたらと云ふ。又三人は
額を集めた。今度は車と早變りした。

折よく其處へ車夫が空車をひいて通りかゝつたので、車屋々々と續
けざまに呼んだ、二度目に車屋は氣が附いたと見えて、車を止めて一寸
振返つた、己れは急に手招いだ、車夫は駈け付けた。

『モ一臺』と己れは命じた、すると『へい』と云ひざま仲間らしいのを
『オーイ』と呼んだ、次に『早く』と急がした、他の一臺は同じく忽ちに

して駆け付けた、二臺の梶は同時に下ろされた。

「旦那どちらへ？」

もう此の邊の車夫なら馴れたものだらうと思ふたので敢て動ずる色もなく、寧ろ威勢よく吉原ツと云つた。

「へい、どうぞお乗りを。」

「どつこい待つたり」

値段を定めないで乗らうものなら何處に後で吹ッかけられても泣面に蜂、それよりか今のうちにビタリと定めて置かうと思ふたので「幾程だ」と聞いた。

すると年老つた車夫が其れを引取つて、

「之丈けを」と指を出した。



云い値どほり
出してやるから
後で祝儀など
云つちや
いけねえぞ

「よしソ云ひ値通り出してやる、然し後で何と云つても祝儀なんぞ全然なしだぞ」

「ようござんすとも！」

それちやと二人は乗る。そして幌をかけられた中には先刻までの半ば濡鼠も急に次第に目的地が近づいたが爲めか、又は久々で車に乗つたが爲めか傲然と腕を拱ぎソり返つた。

車夫は「ホイ『ヤツ』と掛聲して勇ましく雨の泥濘にめげず勢よく走る、幾度か折れ、幾度か通行人を掛聲で威かしながら、聽て餘ッ程近くへ來たと見えて、今度は車をゆるめながら、

「旦那、吉原の何處です？」と聞く。

「△△だ、知つてるか」と一度行つた経験ある寺田は返事し、且つ質

問する。

「知つてますとも！ 彼處の主人と云つたら吉原の全取締役でさア」
此の車夫め仲々通振つたことを云ふ。

車は再び宙を飛ぶ様に駆けた、と突然ガタリと止まつて「御客さま——」と大聲を張り上げた。張番してゐる筈の番頭（此れは何んと云ふ名稱を有するものか己れは未だに知らない）が、よもや晝からお客がと思ふてか奥の方に引込んでゐたらしいが、此の聲を聴くと同時に轉ぶ様に飛んで出て来て、「おらつしや」とペコペコ首を下げる。

寺田はズン／＼入つて行く、己れは二人の車夫に約の如く渡し、その儘奥へ同じく行かうとすると、

「モシ旦那」と車夫が急に止める。

「ウン？」

「これぢや」と掌の銀貨を示して頭を掻く。

「だつて約束ぢやないか、あれ程堅く」

「だつて幾分色をつけて下さらくちや、なアオイ」と相棒を傾みる。

「どうか旦那、もう二分宛へッへッ」

「二分と云ふと？」

「ヘイ廿錢で」

足元を見込んでツケ込むコ、ナ白者め、然し此處所で僅か許りを出せぬ、くれろと争ふてゐるのは紳士でもあるまいと、ヨシと頷つきながら財布の中を覗いて見ると生憎こまかいのが少しもない、そんな筈でなかつたがと猶も念入りに見たが矢張りない、仕方がないから一圓紙幣をボ

ンと投り出して「サア歸れ。」

すると之を見た二人の車夫思ひも寄らぬ過分であつたのに驚いて「ハイ、ハイ相済みません、どうぞお委くりお楽しみで。」

なんだコラあとの文句は。

之れでよしと己れは奥へ入つて行くと、先刻からの様子をヂツと見てゐた番頭、

「旦那、もう吉原へお入りになつたが最後、車夫は十人と云ふ十人皆なあゝ云ふ風で、幾分貫はなくちや承知して歸つた者がありません、仕方が無いんですなア」と幾分己れがひどい奴等だなアと口ごもつてゐるのを慰めがてら云つた。

「フウ」と軽く異様の笑ひを見せながら其處に立つてゐた寺田君と並ん

ゐる、ヘン洒落れてゐるナ。

取敢へず一吹燻らしてゐると、『ようこそ』と云つて四十ばかりの中婆がやつて来た。そしてチャブ臺の足を立て、行つたかと思ふと今度は火と鐵鑊を持つて来た。再び姿を消す、暫らくは何んの音沙汰もなかつた二人は疲れが出たのか黙つた儘時々顔を見合せては、にやりとするのみ。程經て遠くから次第に近づく廊下を歩く草履の音がする、それは正しく草履の音である、げに聞き馴れぬ異様な音である。次第にその音高まつた、とビタリと自分等の居る室の前で止まつた、閉めてあつた障子がスツと開いた、女であつた、若い女であつた。

『オヤよくこそ』と女所謂これが花魁だらう寺田君を見てにこつとした寺田はシテやつたり顔に少しく身體を起した。

花魁は今度は僕の方を向いて『ゐらつしやい』と云つた、己れは黙つて頷づいた。

『此の方は初めなのね』と花魁は寺田君の顔を見て云つた。

『そうだよ』と寺田は答へた。

『あゝア眠い、今寝てゐたのよ、寢就いた許りの所へ起しに来たんですよ』と花魁は欠伸を咬み殺して云つた。

『そいつア濟まなかつたね』と寺田は口先許りで云つた。先刻聞いた紅葉と云ふ花魁は之れだナ。

茲で一寸己れの見た利那の吉原の花魁なるものを説明する、彼女は芝居で見るが如き、又繪で見るが如き、頭には矢の如く澤山簪を挿してゐる者ではなかつた、單に衣服を普通人の如く着けたそれと違ひは無か

つた。己れは質問した。

「もう少しピカピカツとしたものが花魁ぢやないのか？」

と花魁君紅葉どのに聞けよ。

「そりや昔よ、今はねえ貴方」と寺田をたのんだ。

「そうだ、君そりや昔だよ」と寺田も略同様の解答を己れに與へた。

花魁は其の又あとを引受けて、

「でも初會——初めてのお客にはうちかけを着てお目にかけるのよそしたら見違へる許りに綺麗よ、だけど其れも近頃は漸次省く様になりました、もう着のみの儘よ」

「フム、フム」と己れは唯頷づいた。

「時に此の方には誰れが」と花魁は話を代へて寺田を見た。

「己れに何處女が此處にゐるかよく知つてるもんか、紅葉が選擇の権利があるんだ、本樓一等の美人を配してアツと言はせて遣り給へナ」

「さア誰れが、こツと」

と云つて考へ込んでゐる處へ又中婆が來た、花魁は之れはいゝ相談相手が來たと許り中婆に其れを持ちかけ、二人でヒソ／＼すること暫し、聽て「そうね」「そうね」と合點しあつた後、「高雄（假名）さんがいゝわ」と花魁は己れを向いて云ふ。

「美人かい？」

「美人だわね」と其の顔を中婆に持つて行く。

「屹度お氣に召します、水瓜の受合よ、外に更科（假名）さんと云ふ美しい人がゐますけど、どうも此の方には高雄さんが向くらしいわ」と獨

りで決めて了ひ、

「お婆さん、ぢや呼んで来て」と云つた、畏まりましたと中婆はさん下がつて行く。

二言三言雑談を交へてゐると、カヲリンコロリン／＼の獨特が遙かより聞えて来る、来たぞ、来たぞ。あゝ美人か醜婦か、己れはヨリ一倍人よりも好嫌のある人間だぞ。

「此處ですよ、お這入りなさい」と先刻の中婆が案内して来たらしい。

「御免なさい」と云ふが早いか戸が開いた、そしてスツと入つて来て御辭儀した。

最初入つて来た時チラシと己れの此の眼に映じた高雄、今又淑やかに御辭儀する風情を見詰めた高雄、げに美人である。一寸見るあの色の白

さ、一寸見るあの顔の美しさ。あゝ思ひきや吉原に此の美人ありとはあゝ思ひきや。

傳へ聞き己れは吉原と云ふ所は田舎丸だしのたゞ白粉をのみコテコテ塗つた全で里芋をむいた様な女ばかりが揃ふてゐるものだとのみ思ふてゐた。

然るに見よ此の高雄を。天降りませるが如きと云ふ様な形容詞を使ふ程でもないが、美中の美である。己れの心は俄かに躍つた、ハツシヤイだ。あゝ無理はない無理はない昔の謠に『君と寢よか五千石とろか、まゝよ五千石君と寢よ』

とあるが、御尤だぞ、此處美人が窈窕と控えてゐるんだもの、五千石位は何うでもいいと思ふのは當り前だ。

又斯う云ふ話がある、家の息子が堅気で困つた腹中に云ひ含めて無理に吉原へ連れ出す、その一晩からボーシとなる、勘當なんのそのと云ふ氣にまでなる、皆此處のに出會したが故であらう。

又曰くだ、妻子ある武士で交際上止むを得ず一夜を吉原に遊んだ、それが病みつきとなつて妻は離縁、子は追ひ出す、そして夢中になつて花魁の袖の香を慕ふた者もあると本にあつたが、一面斯うして眼のあたり美しい花魁と云ふ者を見るに及んで其れもそうかいなアと思はざるを得ない。

己れは恍惚となつて暫し見惚れてゐた、幸ひ家の妻の躰がよく、魂宙に迷ふと云ふ不埒な心は起さなかつたが、研究上から見て實に惚々する哩。

高雄は直ぐ己れの傍へ寄つた來た、高雄は一目見て紅葉と寺田はと立所に解決をしたらしい、私の客は此の方だと思ふたんだらう、時々チラツ／＼と然れを見上げた、屹度蟲が好くか好かないかを検査したんだらう、そして聽てそれも終つたらしい、検査は見事「好いた」と云ふ斷決を彼女の頭に閃めかしたんだらう、何故ならば彼女はそれから色んな話を己れに持ちかけて來たから。

幾程も客でも此の蟲の始いた好かぬは必ずあるものだとは新橋のある藝者が己れに云つてゐた、そして好かぬ客であるとなんだか其の人の語合ふことが厭で／＼とは其の際の言葉であつた、その筆法から推して己れは此の花魁の先前からの様子に依つて己れは好かれたナと思ふた、流石は己れの男振りだ盛りは過ぎてゐても残の姥櫻にあらで男櫻とさて

ゐるんだと、此の頃メキ／＼年寄面になつて近頃男振りの男をだに口に
しなかつた己れも斯うもてゝ來ると自然に矢張り己れの男振りがと若氣
がコミ上げて來る哩。

「何を持つて參りませうか、御飯にしませうか、恰度時刻ですから」と
中婆が口を出した。

「御飯は今精養軒で喰て來た許りだ」と二人はソラ、ソロ／＼ぼられる
手が頭の上へ翳されたぞと思ふたから素早く匆ね付けて了ふ。

「ぢや何にしませう？」と又聞いた、實際は何も欲しくはなかつたんだ
けど、然う云へば何んだか吝々して居る様に怠はれるし、さりとて欲し
くも無いものと思案に餘つてゐると、寺田もそれには困惑したと見え
てホト／＼征められるに窮した擧句、

「何も要らないんだけど、それぢや」と云はうとするので、己れは一層
云ふんだつたらと思ふて、

「ぢや果物を、それに酒とビール」と命じた。そして己れは單に其れ丈
けをのみ云ひ付けたことが若しや花魁連中から「なんだ高がそれ丈けし
か」と吝な連中と思はれやしないだらうかと云ふ懸念から、それを防禦
する方法として、故意と寺田に話かけて、

「ねえ君、昨日の花月の料理はよかつたねえ。今日は何うして自働車が
あゝも無かつたんだらう、然し今の車夫は威勢が宜かつたね」を續けざ
まに連發して先刻軍夫から強請られた時苦蟲つぶした様な顔をしたのを
嚔にも見せず高らに持 かけた、寺田もそれに巧みに應對した、花魁も
此の會話を聽いてちつとは何うだ我々の身分の程解つたらうと其れとな

く様子をうかがいつて見ると、どうだい彼女等は男同志が二人で話合つてゐるのを好い機会にして内輪話に夢中になつてゐて折角の此方の苦心の程に耳だに假さうとしない、張合も少つともありやしない。己れは唇嚙んで苦笑ひした。

『どうもお待せしました』と云つて中婆は註文の品を運んで来た、それを見て己れはアツと驚いた。全で大きな盥見たいなものに其れこそ眞に山程盛り立て、持つて来るんぢやないか、ど、どうして此慶澤山喰べられるのか。成程先刻寺田の云つた通り、又かねて噂の違はぬ此慶事をし、て暴利を貪ほるんだナと思ふと寧ろ腹立たしくなる。酒もさ、ホンの緒口に一杯呑めるか呑めぬ位だから精々二人で銚子の一本もあれば倒れて了ふと迄先刻付け言して置いたにも係はらず四合罐一本提げて遣つて來



こんなに沢山喰べられるものか

ると云ふ鹽梅、ビールも一本が關の山と云つて置いたのが二本と云ふ形で現はれると云ふ仕末、さア斯うなると後が少々氣に成りだしたぞ。

それ等の果物も町に賣つてゐるのは違ひ皆一粒選りの見事極まる物許りであつた、それを山盛りと御座る、オイ寺田いゝか大丈夫か。寺田は知名の畫家とは云へ清貧自ら甘んじてゐるの士である、己れとても其れ以上である、先刻天ふらを淺草でバクついたあれが恰度二人の分相應な所であつたのに。

なアに斯うなりや構ふもんか、幸ひ己れは一寸電話をかければ「ヤツ先生それは」と飛んで持つて來てくれる特志家が何日何時でも後に控へてゐるからピクともしなぞ、少々燒糞の云ひ分だが斯うして客から絞上げたもので此等大厦高樓が立つのだと思ふとムラムラとするのは人

情だ。

嘗める様にして杯を執つた、それでも早くも微燻は身體に廻はつた寺田も矢つ張り左様だ、己れは顔には少つとも赤らみが出ないが頭がボツとして來た、二人は其の酔ひを打消す爲めに果物をグン／＼喰つた、恰度此慶時刻へ來るには馴れてゐるんだらう所謂番頭らしいのが宿所姓名を附ける爲めに入つて來た、それを機會に——機會と云へば變だが——待つてましたと許り、又番頭もそれを當にして來たと思はれる位、花魁連は一樣にそれツと許り酒を薦めビールも取上げた、番頭はグイグイ柄杓なく呑んだかと思ふと聽てケロリとして「御馳走さま」と御辭儀してもう用はないと許り去つて了ふ。

果物は又我々がもう飽いたと思ふ頃合を寸分の隙なく見計らつて中婆

は下げて行つた、下げて行く時二人の花魁に少し宛すそ分けを残して行つた、それ等に紙に載せて簞笥の上に置かれた、男の前で物を喰ふと愛憎を盡かされる憂があるからと、五れ等の前では一ツも手を附けないでゐたんだから、その反對に我等去つての後にウンとバクつくものと思へば過ちは無し。此慶行儀にかけては其れと明らさまならねど藝者にしろ花魁連にしろ嚴しい不文律があるに違ひないと睨んだが如何に如何。斯くて室の總ては持ち去られて了つた後はガラリンとなつた、一寸手持無沙汰の感がある、斯ふ云ふ時には煙草と一吹フカーリと燻らしてゐると、

「もう私の部屋へ参りませう、参りませう」と高雄は己れに薦め出して來た、寺田と己れとは暫らくは泣きの涙で無くて嬉し涙で別れ嬉し涙で

又ピタリと顔を合はすことになるんだ、己れはそれではと立上がつた、そして寺田と一種云ふに云はれぬ妙な顔を交換して、その儘高雄の後から附き随つて行つた。幾ツかの室々の前を通り過ぎて、「さア此室ですか」と案内された部屋は前者と略同様であつた、唯一偶に中央公論の古びのが見付かつたのに一寸異なる感に打たれた屹度客が忘れたか、或は誤り可憐様に所謂水火もお前の爲めなら辭せぬぞと云ふ健氣極まる男から貰つたんであらう。

さア幕を下ろした。よく聞け芝居と云ふものは之れからと云ふ所で幕が下りるものだ。

研究の結果を申上げる、「吉原遊びは晝に限る！」

二等賞聲

親戚の山田さんが臺灣から上京して来た、公明と私用とを兼ねた忙がしい旅であつた。彼は二十日間も己れの家滞留してゐた、一日今日は千葉へ行つて来るからと朝早く出かけて行つた、歸つて来たのは晩遅かつた、己れは寝ようとしてゐる時「今歸つて来たよ」と云ふ聲がした妻は出迎へに出た。

「ホイ／＼今日はいゝ物を貰つて来たよ」とニコ／＼しながら山田さんは茶の間へ入つて来た。見ると風呂敷に四角なものを包んでゐる、何だか判らない。

「なに？」と己れの眸は大きく開いた。

「出して見せよか」

と其の風呂敷包みの結びに手をかけた時に中でパタ／＼と音がしたと見るうちに結びは解かれて大きな鳥籠が眼の前へ突出された。

「鳥だナ」

と己れは云つた。

「ホーライ、鳥だろ、この鳥の名を知つてゐるかい、鶉だよ」

「へーえ鶉と云ふのは此鳥ですか、へーえ始めて見ました」

と己れはこれが近頃大流行の鶉かとテツと眼を据えた、一ツの籠の中に鶉が二羽ゐた、二羽とも何かにおびれたかの様に小さく羽根を丸めて身動きもしないでゐた。

『どうして此廢物を貰つて來たんです？』と己れは合點が行かなかつたから斯う聽かざるを得なかつた。色の黒い山田さんは臺灣に數十年を生きてゐる人である、しかも夥だしい鳥ぎらひである、その鳥ぎらひの人が嬉し相にニコ／＼鳥を持つて來るんだもの、その理由が判らない、『實は斯うだ』

と山田さんは最後の煙草を吸ふて切り出した。山田さんの世話してゐる男に今村と云ふのがある、その男の妻が何んとなく健康上面白くない或日醫者に診斷させた、すると肺病とあいだなすつた。俄かに仰天したのは今村である、今村は何はさて置き第一に山田さんの所へ駆けつけていゝ方法もがなと相談した、兎も角も服藥が肝心だと土地で有名な醫者に診て貰つて薬をとつてゐるが何うもはかばかしからぬ、その間一年、

何等顯著なる變化の様子も見えぬ、今以つて病床に打ち伏して呻吟してゐる。それには今村も困じ果てた困じ果てたのみか折角刻苦して得たる貯蓄も悉く費ひ盡して了つた。何うすればいゝか判らないと失望落膽のあまり又も山田さんに泣きついて來た。恰度その時は上京間際であつた。そこで山田さんはそれぢや近頃内地では鶉の卵が肺病に最大良藥として持つて囃されてゐるときいてゐるから今度内地へ行つたら一層鶉の雄雌兩方を求めて來てやらう、それを育てゝその新しい卵を呑んだら存外利目があるかも知れないからと慰めた。今村は感謝の涙を湛えて『どうぞ願ひます、どうか願ひます』と伏し拜まむ許りに頼んだ。山田さんは幾度も確かに承知、確かに承知と胸を叩いて見せた。そして上京して來た。

所が今日圖らずも山田さんは或る用件があつたので千葉の某豪家を訪ねた、色々の話が出た、その時何気なく山田さんは鶉の話をした、すると鶉なら私の家に澤山居りますが、一體御覧になつたことがありますかと訊かれた、いや無いと答へると、それぢやと云つて召使の者に相圖するとへい畏まりましたと云つて聽て持つて來たのは此の二羽であつた。

主人はさも得意氣に此の中の一羽は先達當縣で鶉の品評會があつた時に二等賞を取つて一百圓の懸賞金を頂戴した逸物であると語つた。フム／＼と山田さんは結構な鶉ですねえと感心して見せて、一體鶉の卵と云ふものは肺病に利くと云ふ話ですが事實ですかと訊いた。そんな話ですなと主人は相鏈を打つた。そこで實は私の知合にと山田さんは今村のことを詳しく物語つた。先前から黙つて聽いてゐた主人は何んと思ふた

か『ようござんす、それぢや此の鶉をお持ちになつて下さい』と氣前大さく見せた、山田さんも其れには驚いた、本當ですかと念を押して、それぢや此麼い、鶉でなく悪い方で結構ですから、悪い方と取變へて下さいと尻込した。然し一旦さつぱり口を切つた主人は御遠慮なく／＼と切に薦めて止まなかつたそれぢやと山田さんは今村も何麼に喜ぶでせう、喜ぶでせうと云つて貰つて來た、それが今持つて來た此の鶉である。

『へーえ鶉方が一百圓の懸賞を取つた鶉ですか』

と云ひながら己は今更吃驚した様に眼を丸くして籠の中を覗いた。

『さア鶉方だつたか己つひ明白見當が附かない』

と山田さんの返事も頼りがない。

『然し兎に角雌だと云つてゐたから』

と云ひながらヂツと眼を据えて、

「ウム此方の方だ、此方の方だ、ソラ此方の方の鶉が肥つてゐるだらう？」

「肥えてゐますことはゐます」

「ウム此方だ、確かに此方だ、これが雌かよ」

と山田さんはさもコロンブスがアメリカを発見した様な聲を出して云つた。恰度そこへ己れの弟が「やア」と云ひながら入つて來た。オヤ鶉がゐると一寸驚いて坐り込み、どうして之が手に入つたかと訊が儘に山田さんは今云つた許りの説明を又新たに繰り返へした。

黙つて聽いてゐた弟は、

「一體どうして臺灣まで持つて行く積りか」と訊ねた。

「ナニ一緒に汽車に乗せて行くさ」と山田さんはさも無造作に答へた。

「然し岐阜に立寄り、金澤に立寄り、それから臺灣へ歸へるんでせう、その道中一緒に持つて行くんですか」と弟は重ねて訊いた。

「そうさ」と山田さんの返事は依然として變らない。

「汽車で一體矢つ張り二等室に置いてやるんですか」と弟は追窮した。

「そうさ」例に依つて例の如き返事。

「そりや不可ない、若し判つたら鐵道違反で罰金ですよ、其罰金は重き筈ですよ」

「ナニ判るもんか、風呂敷に籠を包んで結つて了へば何だか見當が附かならう。」

「そりや屹度見附かる！」と弟は斷案を下して、「其上鶉の飼養法と云

ふものは仲々難かしいものだから、少し手當を怠ると直ぐコロリと死んで了ひますよ』

『そんな物か知ら』

と山田さん茲に一寸心配になり出したらしい顔をして鶉を見た。そして、

『然し今村が己れの歸るを待ち構へてゐるんだからな、それに』

と云つて、傍の包みを引き寄せ、

『此の通り廿日間分までの餌まで悉皆用意して呉れたんだからな』

『あんまり私は申しませんが、長い道中、此處物二羽の爲めに云ふに云はれぬ面倒臭さが湧いて來ますよ、満足に臺灣まで到着させることが出來たら御慰み、天勝の手品以上の拍手喝采ものですよ』

と弟は手厳しくやつて退けた。それでも山田さんは『ナニ大丈夫だ、

己れは屹度持つて行つて見せる』と大に力味む口の下から『然う云へば然うかも知れんな』と今更憾めし相に鶉を見返つた。その晩はそれで鶉の話はブツ切れて、あとは又山田さんの好きな刺身と酒で坐は賑やいだ。翌朝である、何を思ふたか山田さんは眼を醒ますや否や、

『此の鶉は此の家に置いて行く』と云ひ出した、そして『矢つ張り湊君の云ふ通り考へて見ると充分な面倒を見られないからなア』

と呟やいた。

『そした方がいゝでせう』と弟は自分の意見が通つたので誇り顔に云つた。屹度この時今村は臺灣にゐてイヤな噂を連發したことであらう。思はぬ儲け物をしたと思ふたのは此の僕である、悪い鶉ならいざ知らず一聲百金を抛ち得た鶉である、此處の持つてゐたら毎日一つ宛新ら

しい卵を生んで呉れるのみならず、まだ聴いたこともないが、さぞや魂も溶ける様な美しい聲で啼いて呉れるだらう、平調な家庭も爲めに時として詩趣横溢の概があるだらうと雀躍りして申受けた。

その日山田さんは岐阜に向けて出發した。

鶉に就いての一切の世話、それは皆お前の責任だぞと己れは妻に云ひ渡した、妻も『なアに此麼小つぼけな物二羽位の世話なら』と高を括くつた返事をして應諾した。己れは近頃上流社會に於て鶉の飼養は唯一の娛樂になつてゐるんだから、我々が斯うして鶉を飼つてゐると云ふことは半面に於ては上流社會と云ふ楷段へ一歩足を踏み上げた様なものだと得意満面の體、妻も亦それを聴くと同時に坐敷の真中に鎮坐まします公爵夫人を定め込んでツンとして見せる、二人共鶉二匹で悉皆上流社



會くわいになつた。

その翌よくばん晩己おのれれが外そとから歸かへつて來ると、妻つまは鶉うづらの飼かか方かたと云いふ本ほんを片かた手に半なかば涙なみだ聲こゑを出だして、

「あたし鶉うづらの世せ話わなんか眞ま平ひら御ご免めんよ、餌え一つでも竝なみ大たい抵ていぢやなくつてよ今朝けさは籠かごも新あららしく買かつて來るわ、小ちいさい播すり鉢ばちも用よう意いするわ、それに毎まい日にち青あお菜なの汁じゆを餌えの中なかへ播すり合あせなくちやならないと云いふんだからと八百や屋やへ走はしるわ、下した敷じきの砂すなは隔かく日じつに代かへるの其その砂すなは一たい體てい何どこ處こにあるのやら。

第一だい餌え一つ拵こしらへて、ドロ／＼になるし、ドロ／＼になれば鶉うづらさんおシツコ許ばかりするし、隔かく日じつどころか日ひに幾いく回くわいとなし砂すなを代かへなくちやならぬし此こん麼や面めん倒たう臭くさいものは三千さん世せ界かい訪たつねてもありやしないわ、誰たれかに遣やつて了しまひませうよ、もう上じやう流りゆう社しゃ會かいにならなくつてもいいわ。

「然しかし百ひゃく圓えんの啼なき聲こゑをしたんだぞ」

と己おのれれは百ひゃく圓えんを振ふり翳かざして威おど嚇おし付けてやつた。

「百ひゃく圓えんでも二に百ひゃく圓えんでも構かまうものですか」

と、劍けんもホロ、に匆むね付つけ、

「啼なく／＼と仰おつしやつたので耳みみを濟すまして聽きいてましたけど少ちつとも啼なきやしないわ、張はり合あひも少ちつともない鶉うづらよ、イーイ」と可か哀あい想さうに二に匹ひきの鶉うづらを頸あごでシヤクツて、

「ねえ貴あなた方かた、何どうかして下くださいな」

「然しかし卵たまごを生うんだろ」

「卵たまごなんか生うむもンですか、山やま出だしの女ぢやう中ちゆう見けんたいにオシツコ許ばかり垂たれてゐる、雇やとひ手てがあるもンですか」

「然し辛胞しる。辛胞して育てる、屹度その中に福音があるに違ひないから」

「知らない、知らない。其處に仰しやるなら貴方が世話して下さいよッ」

「イヤ旦那は其處事に手を出すものぢやない」

「貴方はせつば詰まると直ぐ旦那を持ち出すんですもの、チと此の御令夫人つまり奥様いゝえ〜貴方の最も慈しむ最も愛する我が愛妻の心情も察して下さいナ」

「そりや察するよ、察しに察した上歸する所辛胞が足りませんナ」

「知らないわ」

「知らないけりや何うでもしろ、百圓の啼き聲の鳥だになナ、フイに買手が見附かつた三百圓で譲つて呉れ——が何日何時振つて来るかも知れ

ないよ、そしたら彌が上にも着物が出来るだらうし、箆筒も増へるだらうし、要するにモ少し辛胞して育てる育てん如何に依つては、己れは多くは云はぬ放したいなら放せ、放さうか、放すぞ」

と己れは籠に手をかけた。

「ま、ま、お待ちなさいナ、それ程にしなくたつてもいゝぢやありませんか。」

「然し邪魔だと云ふものを……」

「いゝぢやありませんか、モ少しあたし育て、見ますわ」

「育て、見る？」

「だつて何處となく可愛い〜んですもの！」

ホッ、ホッ俄かに旨く云ひ出したナ。

鶉は再び此塵家にあつては幸か不幸か知らぬが世話されることになつた。

鶉に就いての互の沈黙三日、四日目の朝に妻は又切り出した。

『どうか後生ですからあの鶉を仕末して下さい、兎ても遣り切れたものぢやありません』

と又も冠を脱いだ、その様は眞實鶉一つの爲めに骨肉共に疲弊の極に達すと云ふ投げ出した最後の叫びであつた、己れも其の様子を見て餘ッ程困つてるナと察した。

『ほんとに山田さんで今になつて考へて見ると有難迷惑のものを置いて行つたものだわ、湊さんも悪いわ、あの時彼塵事を云はずに黙つてさへゐたら山田さんは持つて行つて了つたのに。』

と盛んに憾み出した。

『ぢや買つて了はふか』

と己れも云はざるを得なかつた。

『えい、もう悉皆出入の商人に頼んであるんですけど駄目よ、現に先達も一寸有望な話があつただけど』

と、妻は其の有望な話の一節を語つた。

先日さかやの主人が来て、オヤお宅には鶉がゐますねとさた、そこで妻は勿體なくも此の鶉の一聲たるや二等質で而かも百圓でと效能書をウンと並べ立てた、すると主人はヂツと聽いてゐて聽てさう云ふいゝ鶉でしたの私の方に一人心當りがあるから早速其の方へ話合つて見ませうと歸つて行つた。その翌日主人が来て、一應その鶉を見たいと先方に云ひ

ますから一寸貸して戴けないでせうかと云つて来た、妻は貸すはい、がスリ代へられては大變と斷わつた。主人は又歸つて行き、直ぐ又来て其れぢや二等賞を得たと云ふ其の賞状を見せて下さいと云つて来た、それも勿論手元に無かつたから斷はつた。では一體幾程でお放しになりますかといふので、幾程か物を賣つたことの無い者ですから知らぬと答へた、それは困るいゝ加減に附けて見て下さいと主人は頼んだ、妻は私は其慶事は存じませんと答へた、存じませんではと主人は頭を搔いて五十圓なら五十圓、百圓なら百圓と云つて戴きたいと出た、それぢや五十圓と入智慧されて妻は漸つと口切つた。では其慶事にと云つて、今が今までも五十圓持つて来る様なことを云つて主人は歸つて行つたとのことである。

「そして其の話は何うなつたんだい？」と己れは有望だぞとばかり手を握つて膝にじり出した。

「それッ切りの話よ、あとは音も沙汰もありませんよ。」

「話だけか」

「かうよ」

「なんのこつたい。」

「それに今度は心細い話が聴かされたんですよ近頃鶉の値段がグツと下がつたんですつて、寒いのでバタ／＼死んで了ふんだ相です、餘ッ程旨く飼はないと危ないんですつて。夜は火の傍に置いて寒くならない様にいつも又明るい電氣の下に置かないと鶉さん承知しないんですつて。鶉の癖に贅澤だわ。そんな手数が大變ぢやありませんか此の際好きな方に

差上げて了はふぢやありませんか』

『では左様しやうか』

と己れも其れ以上育てると薦めることも出来なくなつて一でもなく賛成し、その日から誰れに遣つたらと物色してゐる裡に又二三日経過した。すると鶉め唐突に、

『ギヤア』と啼いた。實に妙な啼聲である、己れは啼き聲がいゝ、啼き聲がいゝと聞いてゐだからさぞ鶉の様な聲であらうと想像してゐたに忝けなくも百圓の聲は如何に見事なものだらうと楽しい詩趣を胸に抱いてゐたに。

ギヤアとは抑々何んちう聲だ、何んちう興ざましの聲だ、全て蛙の聲酷似だ、阿呆め、烏め、狐め、ギヤアとはな、なんだ、アーン。

『賣つて了へ、遣つて了へ』

と己れは愛想づかしの文句を連發した。妻も

『少つとも育て甲斐のあつた聲ぢやないわ』と腹立し相に柳眉を逆立てた。

愈々此處啼き聲の鶉なら他人に遣つて了ふぞと幾度か宣言してゐる間に又三日経つた、その晩本屋の主人が遊びに來た。その時鶉はギヤツと別室で啼いた。

『オヤ鶉の聲ですね、あの鶉の聲は澄んでゐますね、いゝ聲です』と賞め稱へたので己れは不思議に思ひ、

『彼變な啼き聲がいゝんですか』と訊ねた。

『いゝ聲ですよ。悪い鶉の聲になると聽かれたものぢやありません濁濁』

つてゐます。それと比べたら」

「そうですか貴方は通ですナ」

「通でもありませんが鳥にかけては少しは詳しい方ですが」

「へーえ左様ですか彼の聲はいゝんですか、賃は」と云つて僕は二等賞百圓を話した。

「左様かも知れませんが確かに。」

と首を縦に振つて感に入る様子を見てゐると、あながち一片の御世辭文句とも思はれない。本屋さんは聽て「大切になさい〜」で歸つて行つた。

此處に己れの子供は何時しか此の鶉と馴染み出した、殊に啼き出す様になつてからはサも奇蹟の様に心得て所謂弱者に對する愛撫の念抑へ難

く暇さへあれば「ポツポ、ポツポ」と片言で云つて、見様見真似で近頃は籠の移り代へなんか自らやると云ふ仕末。つまりいゝ子供の玩弄である。鶉も鶉で今では此の家に馴れたのか盛んに本屋さんの所謂美音を弄した、深夜夢眞盛りなる一時二時頃でもギャアとお出でなされる程二等賞を發揮する。

それに最初彼嬾に潘し切つてゐた妻も面倒臭い〜と思ひながらも何時の間にか習慣になつたのか近頃鶉の世話に就いては餘り小言を云はなくなつた、子供の玩弄と心得たからであらう。それに幾程憎いと思ふても其の裡に自然に情と云ふものが湧く、可哀想に云ふ人間の美はしい感情が傳はつて、今では左迄に飽く迄も忌避しやうとする態度に出でない、つまりズル〜べつたりになつて了つた。

所が昨夜である、弟が突然友人の小林君と一緒に遣つて来た、入るか入らないに此の小林君は二十日に結婚するからウンと冷評かして遣つてくれ、小林君の妻は美人だぞーツと怒鳴つた、初心な小林君は「そりやヒドい〜」と眞赤になつて逃げながら其れでも嬉し相に「や今晚は」の聲までが活々として澄んだ。二等賞聲だぞ。

弟は次に「今日は厄介物の鶉を持つて行く」と云つた。

妻の鶉に對する不服の最中或日弟が遊びに来た、「どうかして下さいよ！」と妻は切に弟に願をかけた。若し貰手があつたら早速取りに来るからと云つて弟は引受けたとも引受けないとも見當の附かぬ返事をして居つたことを己れは記憶してゐる。

「實は此の小林君の知己に非常に鳥好きがある、そこへ行て僕が此の鶉

のことに就いて話をした、すると其の家の人が是非譲つて呉れ呉れと頼んだ、それで早速引取りに来た」と唾を呑で云つた。一旦處分してくれと此方から首下げて頼んだ以上今更情が移つてゐるからの、子供の玩弄になつてゐるかのとも云へず、「よし持つて行つてくれ」と奇麗サツパリ何等の未練なしに答へた。

三時間ばかり雑談の後、弟も小林君も歸ると云ひ出した。夫ぢや鶉をと云つて別室から籠を下げて妻は出て来た。弟は風呂敷を借りて其の籠を包んだ。そして「ぢや失敬」と坐を立ちかけた。先刻から黙つて見てゐた子供は突然今や二ツの籠が外へ持ち運ばれるものと知るや「ポッポポッポ」と追ふが如くにして泣いた。大事の〜あたいの玩弄を何うする積りかと許り其のキイ〜叫ぶ聲は天井から塵埃が落ちるまでに響い

た。

「ハイ、それぢや持つて行きませんよ、此處に置きますよ。」

と云つて弟は折角持上げた籠を又下ろした、子供は「そうするのが當然だ」と許り次第々に泣き聲を収めた。そして同時にこれで安心と思ふたのか「おッ乳」と母に獅噛んで乳房を要求し、乳房の現はるゝや飛び付く様にして其の小さい口元をツキ付けた。そして其の一心不亂に吞み續けてゐる隙に二人の大男は静かに籠を持ち上げヌキ足サシ足して玄關へ立ち出で、聴えぬ様な小さい聲で「左様なら」と云ひながら音をぬすんで下駄を履き密つと外へ出た、チン／＼と門の鈴が直ぐ耳へ響いた。到頭旨く往來へ出て了つたナと微にほほえみながら己れは子供の顔を窺み見た、子供は相變らず乳房に夢中になつてゐた。

鶉がゐない、もう鶉がゐない、さう思ふと淋しい裡に一種云はれぬ哀れさが湧く。妻と己れとは黙つて見合した。

旅

二人は今國府津まで来た、そして停車場前の待合室でボカンと面白い顔で見合した、二人とは弟と僕である。

間がな隙がな暇あれば旅行に飛び出すこと許り考へてゐる僕は漸くにして所謂その暇なるものを五六日間得た、締めたと身體をゾクゾクさせて喜び、来る人毎におれば「旅行すれど、旅行するぞ」と吹き立てた、就中その吹き立てに最も當てられたのが己れの弟と妻及び隣の鈴木君である、鈴木君は「よしそれぢや僕も同行する」と力味出した、そして「此の際どうだ家族總出で旅に出るとしたら、興味大いに新たなるせのが

あるぢやないか」と云ふ。それには己れも大賛成、妻を呼んで「お前も連れて行くよ」と宣言した、さア妻の喜びさつたらない「もし〜龜よ龜さんよ」と無上の喜びを強ひて胸に壓へておけない性だから歌に紛らして大に気分の高頂に達した點を示す。そして種々と鈴木君の妻君と協議して「旅行したら斯うして遊びませう、あゝして遊びませう」と遊ぶこと許り畫策してゐる。弟も勿論隨行の一員たる光榮を拍し得た。

出發の日は次第に迫まつた。

所がフイと鈴木君は何を思ふたか唐突に己れを訪ねて来て、「今度の旅行は見合はすことにする」と云ふ。その一言に大分鼻つばしを折られた様な氣がして、「一體どうしたんだい？」と訊いた。すると「僕つらく〜惟んみるに我れ未だ新家庭を造り上げて間がない、だから家財悉く揃ふ

たと云ふ譯には行かぬ。そこで大分世帯じみた考へだが今度は旅行した積りで其の金で客用の坐蒲團と夜具を拵へたいと思ふ、どうか悪からず」といひでなすつた。誠に殊勝な言葉である、己れもそれを聴くと成程神妙な考へだ待てよ己れもそれぢや其懸心掛けのいゝ旦那様になつて、こりや一つ家財を増やすことにしやうかと旅行を断念しかゝる、するとむらゝと旅行！旅行！と心の内底から渦まいて来る、同時に渺々たる大海原仰げば高き山々の數々が眼の先きにチラつき出して来る、チツとそれを堪えてゐる苦しさ己れは其の苦しさに堪えることが出来ない、

「鈴木君は鈴木君だ、己れは己れだ、己れに旅行を止めると云ふのは無理である、須らく旅行せよとあるは精神が齎らした尊き發作である、その發作を強ひて壓へ付けるのは酷である、よしッ己れは誰れが何んと云は

うとも旅行する、旅行は我が新たなる生命である、舊を新に代へる大なる賜物である、その賜物を放擲することは出来ない、旅だ、旅だ、あの旅の面白味、そこには聽て必ずや忽ち都戀しさの念が萌して来るだらうそこには必ず都の女見たさの望みが湧き出して来るだらう、それ等は總て知つてゐる、知つてゐながらも旅行したいのだ、遺傳ではない、天性だ、否々寧ろ幼なき時に哺まれたる家庭が然らしめたのだ。己れのこの旅心は自然に哺まれたるものである、自然の叫びは壓へ付けてはならぬ放しておけ、放しておけ、放しておいて己れの爲すが儘にしておいてくれ。

己れは己れの妻を呼んで、

「お前は今度の旅は見合はせる」と頼むが如くに命令した。その言葉は